

田能遺跡群発掘調査概要・Ⅳ

— 府営農地還元資源利活用事業「樫田地区」の調査 —

2003年3月

大阪府教育委員会

は し が き

田能遺跡群の所在する高槻市壱田地区は、北摂山地の東北部の山々に囲まれた山間小盆地に位置し、大阪府では極めて希少な山と緑に囲まれた地域であります。

今回の田能遺跡群の発掘調査は、府営農地還元資源利活用事業「壱田地区」に先立って、平成14年度に実施したものであります。当該地区の発掘調査は、平成11年度に当該予定地内の遺跡確認調査および早期着手地区の発掘調査を実施し、今年度で4年目を迎えています。

田能地区については、平安時代末期から鎌倉時代初期にかけての数多くの文献が残存していることから、この時代の研究をする上で重要な位置を占めており、歴史的に著名な地域でもあります。しかし、埋蔵文化財については、以前に高槻市教育委員会による遺跡分布調査が行われ、田能北遺跡、田能南遺跡が発見された以外は、実態が不明な地域でありました。しかし、これまで過去4年間の発掘調査によって徐々にではありますが、田能盆地内の遺跡の状況が明らかになってきました。

今年度の調査においては、平安時代初期の建物、炉跡と、鎌倉時代の屋敷跡と推定される建物群、それに付随する屋敷墓などを発見し、多大な成果を挙げることができました。

田能地区の開発は、文献により平安時代末期から鎌倉時代初期に、人々がこの地を開発し定住し始められたと考えられていました。しかし過去4年間の発掘調査によって、鎌倉時代の遺構に加え、平安時代初期や平安時代後期の建物を検出したことから、田能地区の開発が約350年遡ることが確認できました。

また、遺跡の存在が知られていなかった、田能の東側の小盆地に立地する中畑地区においても、遺跡確認調査により中世を中心とする遺跡を広範囲に確認することができました。これらの調査成果は、この地区の歴史を考えるうえで重要な資料を提供したものといたします。

最後になりましたが、発掘調査にあたってご協力いただきました高槻市教育委員会、大阪府北部農と緑の総合事務所、壱田地区土地改良区、地元自治会各位をはじめとする多くの関係者の方々に厚く感謝いたしますとともに、今後とも文化財保護行政について変わらぬご理解とご協力をお願い申し上げます。

平成15年3月

大阪府教育委員会

文化財保護課長 小林 栄

例 言

1. 本書は、大阪府教育委員会が、大阪府環境農林水産部の依頼を受け、農地還元資源利活用事業（榎田地区）に先立って実施した高槻市榎田地区所在田能北遺跡発掘調査および中畑地区遺跡確認調査の調査概要である。
2. 現地調査は、文化財保護課調査第一グループ技師奥和之が担当し、それに伴う整理作業は、調査管理グループ技師山田隆一、小浜成が平行して行い、平成15年3月全ての作業を終了した。
3. 調査に要した経費は、農林水産省および文部科学省の補助金を得て、大阪府環境農林水産部および大阪府教育委員会が負担した。
4. 調査の実施にあたっては、高槻市教育委員会、大阪府環境農林水産部、大阪府北部農と緑の総合事務所、榎田地区土地改良区、森田克行、橋本久和（高槻市教育委員会）、重金誠（能勢町教育委員会）をはじめとする諸機関、諸氏の方々の協力を得た。
5. 調査の写真測量（田能北遺跡）は、日本テクノ株式会社に委託した。なお、撮影フィルムについては、日本テクノ株式会社において保管している。
6. 本書の編集、執筆は、奥が担当した。
7. 本概要は300部作成し、一部あたりの単価は1596円である。

凡 例

1. 座標については平面直角座標（第Ⅵ系）、方位については座標北、標高については東京湾平均海水面（T.P.）を基準とした。
2. 土色の色調については、小山正忠・竹原秀雄「新版標準土色帳」日本色彩研究所 1992を使用した。
3. 遺構番号については、調査区毎に個々の遺構について1から順番に番号を付けた。また、全体でひとつの形をなすものについては、遺構名を明記し改めて番号を付けた。
4. 図面については、平成14年度で座標軸が変更されたため、それ以前のものについては新座標値に置き換えて使用した。
5. 遺物については、挿図、図版の番号と一致させた。

目 次

はしがき

例言

目次

第1章 はじめに	1
第2章 田能北遺跡の調査	3
第3章 中畑地区遺跡確認調査概要	29

挿 図 目 次

第1図 大阪府と調査地点	1
第2図 田能地区周辺の遺跡及び既応の調査地区	2
第3図 田能北遺跡 L区基本層序図	3
第4図 田能北遺跡 L区平面図	4
第5図 田能北遺跡 C・L区平面図	5
第6図 田能北遺跡 L区建物1・2平面・断面図	7
第7図 田能北遺跡 L区建物3平面・断面図	9
第8図 田能北遺跡 L区溝2出土遺物	10
第9図 田能北遺跡 L区溝2出土遺物	10
第10図 田能北遺跡 L区建物1出土遺物	11
第11図 田能北遺跡 L区土坑7平面・断面図	12
第12図 田能北遺跡 L区土坑7出土遺物	12
第13図 田能北遺跡 L区土坑22平面・断面図	13
第14図 田能北遺跡 L区土坑12出土遺物	13
第15図 田能北遺跡 L区土坑55出土遺物	14
第16図 田能北遺跡 L区土坑55平面・断面図	14
第17図 田能北遺跡 L区遺構内出土遺物	15
第18図 田能北遺跡 L区包含層出土遺物1	16
第19図 田能北遺跡 L区包含層出土遺物2	17
第20図 田能北遺跡 N区基本層序図	18
第21図 田能北遺跡 N区溝断面図	19
第22図 田能北遺跡 N区平面図	19
第23図 田能北遺跡 N区土坑1・10平面・断面図	20
第24図 田能北遺跡 N区自然流路20断面図	20
第25図 田能北遺跡 N区包含層出土遺物	21
第26図 田能北遺跡 O区基本層序図	22
第27図 田能北遺跡 O区平面図	22
第28図 田能北遺跡 O区建物1平面・断面図	23
第29図 田能北遺跡 O区炉跡群平面・断面図	24
第30図 田能北遺跡 O区包含層出土遺物1	25
第31図 田能北遺跡 O区包含層出土遺物2	26
第32図 中畑地区遺跡確認調査トレンチ 及び遺跡範囲図	30
第33図 中畑地区遺跡確認調査トレンチ断面図1	32
第34図 中畑地区遺跡確認調査トレンチ断面図2	34
第35図 中畑地区遺跡確認調査出土遺物	34

図 版 目 次

図版1 田能北遺跡 L区

1. L区全景(南より)
2. L区基本層序1(西より)
3. L区基本層序2(南より)
4. 溝9断面1(西より)
5. 溝9断面2(西より)
6. 溝2断面M(南より)
7. 溝2断面K(西より)

図版2 田能北遺跡 L区

1. 建物1・2(西より)

2. 建物1 S P24断面(東より)

3. 建物1 S P24柱根(西より)

4. 建物1 S P16・17断面(南より)

5. 建物1 S P6遺物出土状況(北より)

6. 建物1 S P6根石(東より)

7. 建物1 S P13・14断面(北より)

図版3 田能北遺跡 L区

1. 建物1 S P14柱根(西より)

2. 建物1 S P15断面(西より)

3. 建物2 S P30断面(北より)

4. 建物2 SP33断面(北より)
5. 建物2 SP33柱根(北より)
6. 建物2 SP31断面(西より)
7. 建物2 SP32断面(南より)
8. 建物2 SP18断面(東より)
9. 建物1 SP21断面(西より)
10. 建物1 SP21遺物出土状況(西より)

図版4 田能北遺跡 L区

1. 建物3(西より)
2. 建物3 SP51断面(南より)
3. 建物3 SP40断面(北より)
4. 建物3 SP42断面(南より)
5. 建物3 SP43断面(南より)
6. 建物4(北より)

図版5 田能北遺跡 L区

1. 十坑7木炭検出状況(東より)
2. 土坑7断面(南より)
3. 土坑7遺物出土状況(東より)
4. 十坑22全景(南より)

図版6 田能北遺跡 L区

1. 土壇墓55(南より)
2. 土壇墓55断面(南より)
3. 土壇墓55上面石材検出状況(南より)
4. 土壇墓55遺物出土状況(南より)
5. 土壇墓55烏帽子出土状況(南より)

図版7 川能北遺跡 N区

1. N区全景(南より)
2. N区基本断面(西より)
3. 溝2断面(南より)
4. 溝11断面(南より)
5. 溝3断面(南より)
6. 溝12断面(南より)
7. 溝4断面(南より)

図版8 田能北遺跡 N・K区

1. N区 十坑1・10(南より)
2. N区 土坑1・10断面(南より)
3. N区 溝2断面(西より)
4. N区 横列1(南より)
5. K区全景(北西より)
6. K区 自然流路(西より)
7. K区 自然流路断面(西より)

図版9 田能北遺跡 O区

1. O区全景(東より)
2. O区基本断面(南より)
3. O区建物1(南より)

図版10 田能北遺跡 O区

1. 建物1 SP5断面(南より)
2. 建物1 SP5遺物出土状況(南より)
3. 建物1 SP4断面(南より)
4. 建物1 SP21断面(南より)
5. 火跡群(西より)
6. 炉1(西より)
7. 炉1上面焼土(西より)

図版11 田能北遺跡 O区

1. 炉1断面A(南より)
2. 炉1断面C(西より)
3. 炉1断面B(西より)
4. 炉2(西より)
5. 炉2上面焼土(西より)
6. 炉2断面F(南より)
7. 炉2断面G(西より)
8. 炉3(西より)
9. 炉3断面D(南より)
10. 炉3断面E(西より)

図版12 中畑地区遺跡確認調査

1. 中畑北地区(南西より)
2. 中畑西地区(南東より)
3. 中畑東地区(西より)

図版13 中畑地区遺跡確認調査

- | | |
|--------------|----------------|
| 1. No1トレンチ | 2. No1トレンチ断面 |
| 3. No2トレンチ | 4. No2トレンチ断面 |
| 5. No5トレンチ | 6. No5トレンチ断面 |
| 7. No7トレンチ | 8. No7トレンチ断面 |
| 9. No6トレンチ | 10. No6トレンチ断面 |
| 11. No11トレンチ | 12. No11トレンチ断面 |

図版14 中畑地区遺跡確認調査

- | | |
|--------------|----------------|
| 1. No13トレンチ | 2. No13トレンチ断面 |
| 3. No21トレンチ | 4. No21トレンチ断面 |
| 5. No15トレンチ | 6. No15トレンチ断面 |
| 7. No16トレンチ | 8. No16トレンチ断面 |
| 9. No17トレンチ | 10. No17トレンチ断面 |
| 11. No19トレンチ | 12. No19トレンチ断面 |

図版15 出土遺物1

田能北遺跡 L区

図版16 出土遺物2

田能北遺跡 L・O区

図版17 出土遺物3

田能北遺跡 L・O区

図版18 出土遺物4

田能北遺跡O区・中畑地区遺跡確認調査

第1章 はじめに

今回の調査を実施した樫田地区（第1図）は、高槻市の北部、市街区域から約12km離れた大阪府の北東部、北摂山地の穏やかな山々に囲まれた標高350m前後を測る小規模ないくつかの山間盆地により成り立っている。当該地区は、北と西を亀岡市、東を京都市と接しており、大阪府の形状からいえば、北に瘤状に飛び出した形をなしている。

今回の発掘調査の経緯となった大阪府営農地還元資源利活用事業（樫田地区）は、山間盆地の比較的傾斜のきつく狭小不整形で統一性のない耕地を、府内の公共事業などによって生じた残土を利用し埋め立て、広い水田に整備し、農作業の効率化を図ろうとする事業である。

発掘調査を実施した田能北遺跡（第2図）は高槻市大字田能、遺跡確認調査を実施した中畑地区は、高槻市大字中畑に所在する。これに伴う発掘調査および遺跡確認調査は、本府環境農林水産部と本府教育委員会と協議を行い実施している。調査は、平成11年度に実施した田能地区内の遺跡確認調査⁽¹⁾をかわきりに、3年間継続して実施し、平成11年度に神宮寺西遺跡、田能城跡。平成12年度に、田能北遺跡（A地区）、田能南遺跡。平成13年度に田能北遺跡（B～O地区）のなどの発掘調査を行い、数々の調査成果を得ている。

今回の田能北遺跡の発掘調査は、平成14年8月に開始し、同年12月をもって終了した。

中畑地区の遺跡確認調査（第32図）も、当該事業に伴い実施されたものである。中畑地区内の圃場整備事業については、本事業により田能地区内の圃場整備事業が終了後に実施することになった。そのため、本府教育委員会と本府環境農林水産部と協議を行い、その結果、遺跡確認調査以前には遺跡は確認されていないが、地形および田能地区の遺跡分布状況から、遺跡の存在する可能性は高いと推定された。そのため対象地域全域に遺跡確認調査トレンチを設定して、遺跡の有無を確認することとなった。中畑地区の遺跡確認調査は、平成14年4月に開始し、同年5月をもって終了した。

なお、周辺の位置と環境については、『田能遺跡群発掘調査概要・II』⁽²⁾を参照されたい。



第1図 大阪府と調査地点

注>

- 1) 大阪府教育委員会『田能地区遺跡確認調査概要』 2000
- 2) 大阪府教育委員会『田能遺跡群発掘調査概要・II』 2001
- 3) 大阪府教育委員会『田能遺跡群発掘調査概要・III』 2002



第2図 田能地区周辺の遺跡及び既宍の調査地区

第2章 田能北遺跡の調査

第1節 概要

田能北遺跡（第2図）は、基本的に田能盆地北側の田能川左岸に広がる遺跡で、遺跡の大半は田能川左岸の丘陵縁辺部周辺に存在する。遺跡の規模は、東西長約120m、南北幅約300mを測る。発掘調査は、圃場整備に伴って遺構が削平される地区および遺構面が盛土によって2m以上に達する地区に限定して行った。

田能北遺跡の調査は、平成11年度にA地区、平成13年度に8地区（B～I地区）について実施した。今年度（平成14年度）は、7調査区（K～Q地区）について実施し、調査面積は、約1893㎡を測る。今回の調査区は、東の山塊から西の田能川に向かって下る丘陵縁辺部（K、L、M、N区）と北の山塊から南に向かって下る丘陵の縁辺部（O、P、Q区）とに分けることができる。

調査の方法は、基本的に大阪府環境農林水産部の施工により、厚さ0.15mから0.2mの耕作土層を除去した後、発掘調査に入り、床土層および盛土層をバックホウによって、厚さ約0.05m除去した。その後人力により、厚さ0.2mから0.3mの遺物包含層を地山まで掘削し、遺構・遺物の検出に努めた。

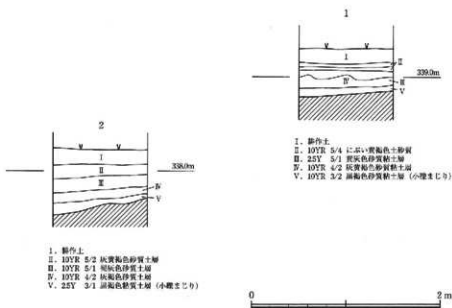
これらの調査区の中で、主に遺構を検出したのは、L、N、O区であり、検出した遺構は、屋敷地1区画、建物5棟、土塼墓1基、土坑2基、焼土坑3基、屋敷地を囲む溝、柱穴などである。

ここでは、主に遺構を検出したL、N、O区について記述する。

第2節 L区の調査

1. 概要（第4図、図版1-1）

L区は、東の山塊から西の田能川に向かって下る丘陵縁辺部端付近に存在する。調査区東側の丘陵上部には、南側の一部を接してK地区（図版8-5）が存在する。南側には、圃場整備に伴い築造された幅約7mの道路を隔てて、平成13年度に調査を実施したC

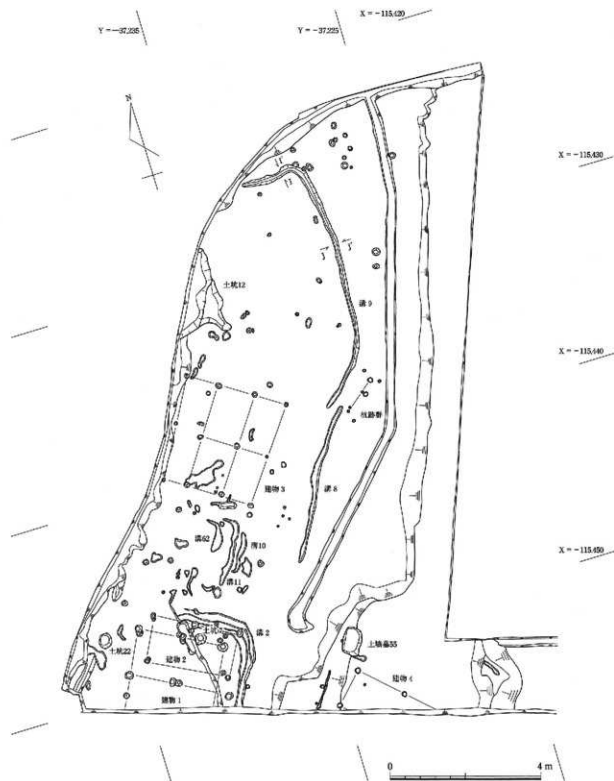


第3図 田能北遺跡 L区基本層序図

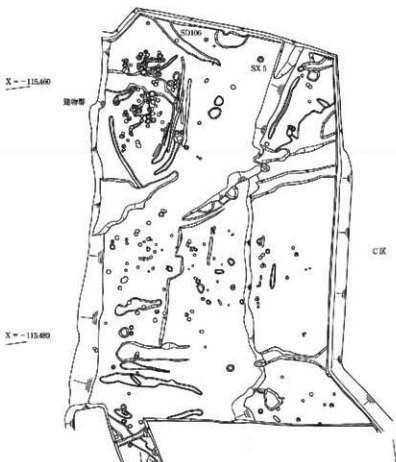
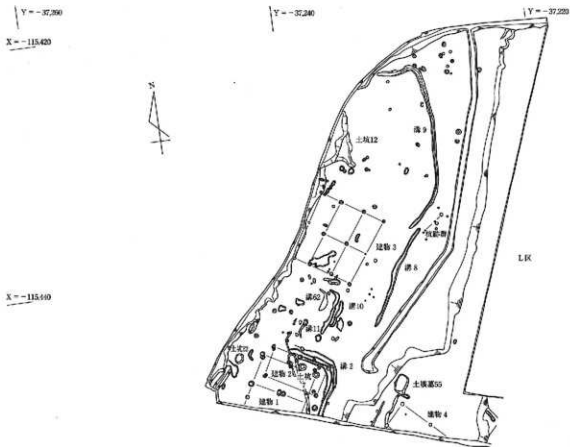
地区がある。

調査区は、現水田の高低差により2段に分かれ、平均の標高は、337.5m前後、調査面積は約712㎡を測る。

検出した遺構は、下段には、屋敷地1区画、屋敷地を囲む溝とその内部に存在する建物3棟、土坑3基、上段には、屋敷墓と推定される土壇墓1基、建物1棟（図版4-6）などである。



第4図 田能北遺跡 L区平面図



第5图 田能北遺跡 C・L区平面图

2. 基本層序 (第3図、図版1-2・3)

前述したように、基本層序は、丘陵斜面を水田造成時に、堆積土および地山相当層が削平を受け、調査区上下2段に分かれている。しかしそれ以前には、ほぼ同様な堆積状況を呈していたものと推定される。

以下、各層の概要を記述する。

I層 現耕作土層で層厚は、0.2m前後を測る。

II層 現耕作土層の床上で、基本的には1層であるが、部分的に2から3層に分けることが出来る。層厚は、0.05mから0.1mを測る。

III層 旧耕作土層ないしは水田造成時の整地土と推定される層で、中世の遺物の他に近世の遺物を若干少量含んでいる。上段、下段で、胎土、色調が異なっているが、上記のことでより同一層であると判断した。基本的に2層存在するが、出土遺物から時期差はないものと判断した。層厚は、現水田造成時の切土部分には存在しないが、最大厚さ0.4mを測る。

IV層 黒褐色粘質土ないしは砂質粘土を基本とする層で、本調査区の遺物包含層である。中世の遺物を含む。層厚0.1m前後を測る。

3. 調査の成果

屋敷地を画する遺構 (第4・5図、図版1-1)

屋敷地は、L地区の面積の約半分を占め、東側を丘陵山側に掘削された3本の溝と、北側と西側を東の山塊から田能川に合流する幅の狭い流路によって区画されている。

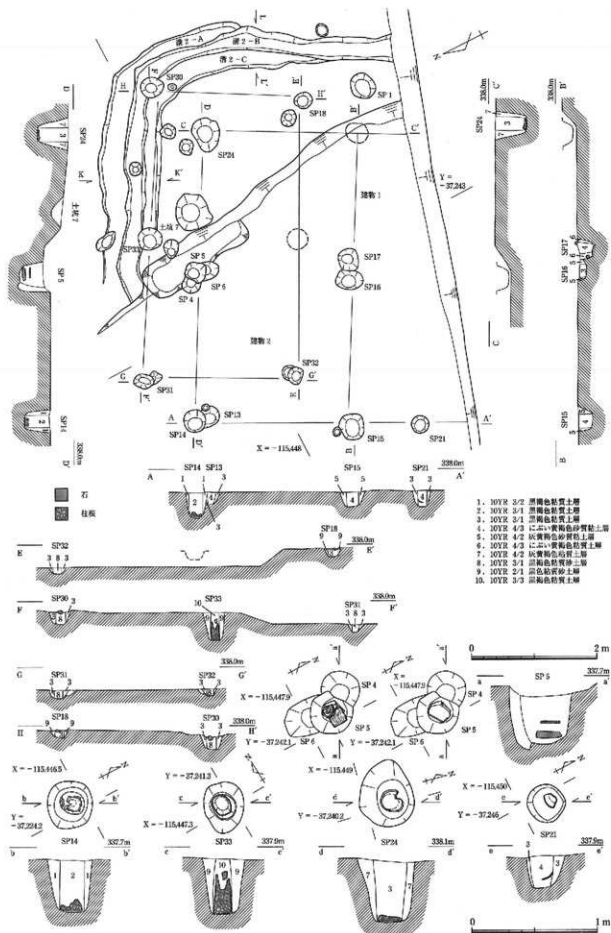
調査区南側の屋敷地については、幅約7mの道路予定地を隔てて存在するC地区(第5図)で検出した遺溝の中で、位置関係および出土遺物からこれらが該当するものと推定される。

南端の区画については、 $X = -115,460$ 、 $Y = -37,250$ 付近から $X = -115,456$ 、 $Y = -37,254$ 付近で北の調査区外に伸びる溝(SD106)。東南側については、調査区北端の $X = -115,459$ 、 $Y = -37,254$ 付近から $X = -115,462$ 、 $Y = -37,246$ 付近で収束する段落ち(SX5)と推定される。

これらから、屋敷地の規模は、東西約9m、南北約39mの範囲に広がるものと推定され、面積は約315㎡を測る。

屋敷地内で検出された主な遺構は、建物3棟、土坑3基などで、この他に屋敷墓と推定される土墳墓1基が東の屋敷地外で検出された。

屋敷地を画する溝群 溝9(第4・8図、図版1-4・5)は、調査区北側から中央にかけて存在する。溝は、 $X = -115,436$ 、 $Y = -37,229$ 付近から $X = -115,426$ 、 $Y = -37,229$ 付近までの間、長さ約10mにわたってほぼ丘陵斜面と平行に延びるが、北側の $X = -115,426$ 、 $Y = -37,229$ の地点でほぼ直角に曲がり、 $X = -115,426$ 、 $Y = -37,229$ の地点で斜面と同一レベルになり収束する。溝の南側は $X = -115,436$ 、 $Y = -37,229$ の地点で内側に屈曲し、 $X = -115,438$ 、 $Y = -37,231$ 地点で収束する。その地点の上方約0.4m付近には食い違う溝8の始点がある。幅



第6図 田能北遺跡 L区建物1・2平面・断面図

約0.2mから0.4m、最大深さ0.08mを測る。

溝8（第4図）は、調査区中央 $X = -115, 438$ 、 $Y = -37, 232$ 付近から始まり南へ伸びる。そこから約0.5mの間は、溝9とほぼ平行して伸び、 $X = -115, 443$ 、 $Y = -37, 235$ 付近で取束する。溝の大半は、検出面とほぼ同レベルであったが、わずかに溝底面に酸化鉄の付着が認められたため、その痕跡が追えた。幅約0.2mから0.3m、最大深さ0.08mを測る。その西側約2.5m先には、ほぼ同方向に建てられた建物3が存在する。

溝2（第6・8図、図版1-6・7）は、北側と東側とを建物1、2を取り囲むように掘削されていることから、当初は建物のみが付随するものと考えていた。しかし、調査区南端でわずかに残存していた斜面と溝2との関係から東側側は、斜面直下に存在していたと推測されることから、同様な機能を果たしていたものと考えている。溝は、上層断面観察では溝が浅かったため切り合い関係ははっきりしなかったが、溝底部の形状から少なくとも3本存在していたものと推定される。各溝は、幅0.3m前後、深さ0.05m前後を測る。

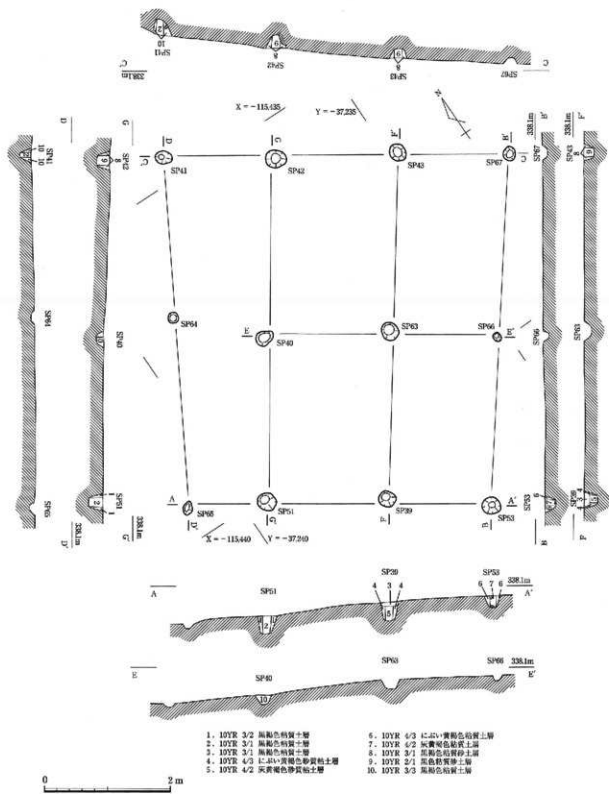
溝内からは、瓦器碗（第9図、図版17-1・3~6）、器種は不明だが土師器の小片が出土している。瓦器碗は、底部から口縁部にかけて内湾し、端部を丸く収めるもの（1、3、5、6）、口縁端部が外側に開くもの（2）、口縁端部が内側に屈曲し、断面三角形を呈するもの（4）がある。高台部が残存しているものは6の1点のみであるが、短く断面三角形を呈する。暗文は内面には認められるが、外面には存在しない。時期は13世紀前半代と推定される。

この事からこれらの溝群は、屋敷地内に雨などで生じた水を山側からの侵入を防ぐためや屋敷地を区画するためおよび建物に雨水が侵入しないためなどに設置されたものと考えられる。

また、溝8と溝9との接点周辺は、本来1本の溝でよかったのにあえて食い違つて掘削されていること、またその上方には杭跡群が検出され、その方向が溝9とほぼ平行であることから、山側からの屋敷地内への入り口の可能性があり、柵などのなんらかの施設が存在していたものと考えられる。

建物1（第6図、図版2・3-1・2） 溝2に囲まれた $X = -115, 450$ 、 $Y = -37, 423$ 付近を中心に存在する。建物の南側は、調査区外にある。それに対応する溝は、位置関係から溝2-Cと推定される。梁間2間（約4.6m）、桁行き2間以上（4.3m以上）を測る総柱の建物で、柱間は2.3mから2.4mを測る。柱穴は平面形では円形に近い形を呈し、径0.3mから0.5mを測る。柱穴は、水田造成のため地山が削平を受けている箇所が多いことから、検出面からの深さはまちまちである。基本的には、柱穴底部が、標高337.3mから337.5mの範囲に収まるが、一部の柱穴の中には浅いもの、地山が削平を受け後述するように欠失した可能性のあるものもある。

欠失したと推定される柱穴は、東側の桁行きの北から2本目の柱穴である。本来柱穴が存在すべき地点周辺を重点的に精査を重ねたが検出されなかった。その地点は、その後、旧地表面を上下の水田に分けるために最も削平を受けた地点であり、上段と下段との高低差が約0.3m存在する。検出した柱穴の中には、その高低差内に収まるものが多く存在することから、欠失したもの



第7図 田能北遺跡 L区建物3平面・断面図

と推定される。また、SP 6（図版2-6）には、根石が存在していた。

SP 14（図版2-7、3-1）、SP 24（図版2-2・3）には、柱根の一部が柱穴底部に残存していた。これらおよび柱穴の上層断面観察から柱の径は20cm前後と推定される。また柱の底部はほぼ垂直にカットされている。

また、SP 16（図版2-4）、17やSP 4、5、6のように柱穴が重なり合っているものが認

められたため、建物は2回ないしは3回の建替えがあったものと推定される。

また、調査区南端付近の $X = -115,444.5$ 、 $Y = -37,241$ 付近で検出したSP1が調査当初建物1に伴う柱穴と考えていたが、SP24との角度の開きが大きいことから、付随しないものと判断した。

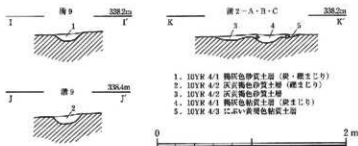
建物1に伴う柱穴からの出土遺物(第10図、図版15・7・13、17・8・10・12)は、SP4から瓦器碗(11)、SP13から瓦器碗(7~9)、土師器皿(10)、SP24から瓦器碗(12)が出土している。瓦器碗は、口径13cmから14.5cm、高さ5cm前後を測り、底部から口縁部にかけて内湾気味に伸びるもの(7、11)、口縁部と体部の境で内側にやや屈曲するもの(8、12)とがある。いずれも高台は短く断面台形に近い。土師器皿(10)は径約14cm、高さ約2.4cmを測り、底部はほぼ平らでやや内湾気味に口縁に至る。

また建物1に伴うものか不明であるが、西の桁行きの軸線上に存在するSP21より、瓦器碗(第10-13図、図版3・9・10、15-13)が出土している。瓦器碗は、口径約13.5cm、高さ約4.6cmを測り、底部から外側に直線的に伸びる。内外面に暗文を施している。

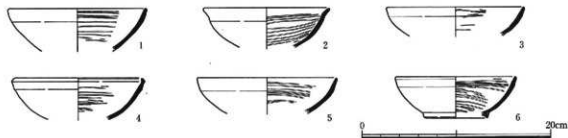
建物の時期は、これらの出土遺物から中世(13世紀前半)と推定される。

建物2(第6図、図版2-1、3-3~8)溝2に囲まれた $X = -115,448$ 、 $Y = -37,242$ 付近を中心に存在する。それに対応する溝は、位置関係から内側にある溝2-Aと推定される。梁間1間(約2.4m)、桁行き2間(約4.6m)を測る建物である。柱間は2.2mから2.4mを測る。柱穴は平面形では円形に近い形を呈し、径0.2mから0.35mを測る。柱の深さは、水田造成のため地山面が削平を受けている部分が多いことから、建物1と同様まちまちである。基本的には、柱穴底部が標高337.5mから337.6m範疇に収まるが、一部の柱穴の中には浅いもの、削平を受け後述するように欠失した可能性のあるものもある。

欠失したと推定される柱穴は、南側の桁行き中央の柱穴で、本来柱穴が存在すべき地点周辺を重点的に精査を重ねたが検出されなかった。この周辺は、旧地表面を上下の水田に分けるために最も深く削平を受けた地点に近く、上段



第8図 田能北遺跡 L区溝断面図



第9図 田能北遺跡 L区溝2出土遺物

と下段との高低差が約0.3m存在する。このことから検出した現水田の上段で検出した柱穴の中には、その高低差内に収まるものが多く存在していることから、欠失したものと考えている。

またSP33（第6図、図版3-4・5）には、柱根の一部が柱穴内部に残存していた。これらおよび柱穴の土層断面観察から柱の径は20cm前後と推定され、柱根の底部はほぼ垂直にカットされている。

建物の時期は、柱穴内からは出土しなかったが、周辺の出土遺物から中世（13世紀前半代）と推定される。

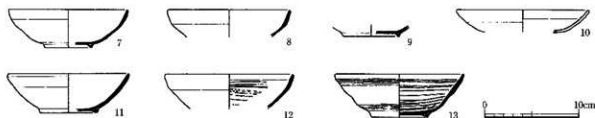
建物3（第7図、図版4-1~5） 調査区のほぼ中央西側の $X = -115,438$ 、 $Y = -37,237$ 付近を中心に存在する。建物の東側2.5m先には、平行して伸びる溝8がある。建物は、梁間2間（約3.7m）、桁行き2間（約5.4m）の総柱の建物で、桁行きの西側に庇が付く。

柱間は梁間と桁行きが異なり、梁間の柱間は1.8m前後、桁行きの柱間は2.7m前後を測る。庇は、北端と南端とでは西側の桁行きからの長さが異なり、北端からでは約1.8m、南端からでは約1.3mを測る。柱穴は平面形では円形に近い形を呈し、径0.15mから0.3m、検出面からの柱穴の深さ0.1mから0.3m、柱根の径は0.1cm前後を測る。

建物の時期は、柱穴からは出土しなかったが、周辺の出土遺物から中世（13世紀前半）と推定される。

土坑7（第11図、図版5-1~3） 溝2に埋まれた $X = -115,448$ 、 $Y = -37,241.3$ 付近に存在する。平面形では円形に近い土坑で、径0.5m前後、検出面からの深さ約0.2mを測る。土坑の溜鉢状の底面から土坑中段にかけて、地山面に張り付いた状態で炭の細片が確認された。炭の細片は形になるものは極めて少ないが、中には長さ約10cmになるものも確認された。炭片の肉眼観察では堅炭とは考えられず、消炭の可能性が高い。土坑内部の壁面は、赤褐色を呈することなど焼けた痕跡は認められなかったことから、火を使う施設ではないと判断した。土層断面の観察の状況から、使用時には開いていたものと推定される。これらの状況から、今のところ消炭の貯蔵施設と考えているが不明な点も多い。

土坑埋土中より瓦器椀、土師器皿が出土した（第11・12図、図版5-3）。瓦器椀（図版15-14、図版17-19）は、口径13cmから14cmを測り、底部から口縁部にかけて内湾気味に伸び、口縁部がやや外反するもの（14、15、18）としないもの（16、17）とがある。高台（19）は貼付高台で短く断面三角形に近い。内面には暗文が認められ、外面に暗文を施しているものもある。土師

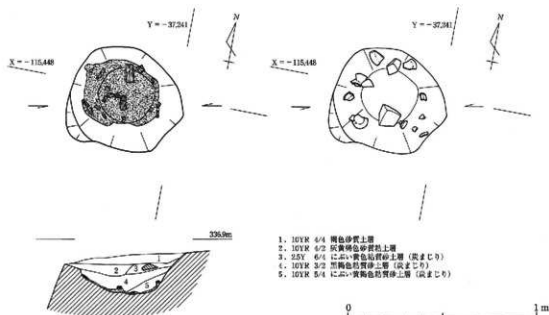


第10図 田能北遺跡 L区建物1出土遺物

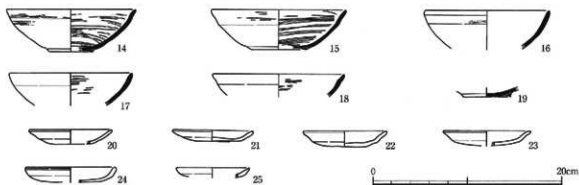
器小皿 (図版15-22) は、底部から斜め上方に直線的に伸びるもの (20、21)、外反気味に伸びるもの (22、23、25)、内弯気味なもの (24) とがある。これらから土坑の時期は建物の時期とほぼ同じで13世紀前半代と推定される。

土坑22 (第13図、図版5-4) 建物1・2の西側 $X = -115, 446.7$ 、 $Y = -37, 246$ 付近に存在する。平面形では楕円形に近い形を呈し、長径約0.8m、短径約0.65m、検出面からの深さ約0.3mを測る。土坑内から長さ0.1mから0.3m、幅0.1mから0.2mを測る10個前後の河原石が検出された。河原石の用途は不明だが、表面は火を受けたものと推定され赤褐色に変色している。しかし、土坑内部は焼けた痕跡は全く認められなかったことから、土坑の用途は不明だが、別の場所で河原石を用いて火を使う作業が行われた後、使用されなくなり土坑内に廃棄されたものと現在の所考している。土坑内から瓦器、土師器の小片が出土したが図化できなかった。

溝10・11・62 (第4図) 建物1・2と建物3に挟まれた $X = -115, 442$ 、 $Y = -37, 238$ 付近を中心にして存在する溝群である。検出した3本の溝は、ほぼ平行に走り、北側ないしは、南側が「L」字形になる。このことから溝の内側に存在していたと推定されるなんらかの施設に、東



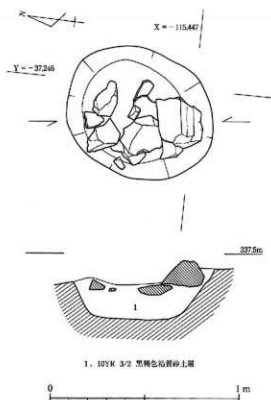
第11図 田能北遺跡 L区土坑7平面・断面図



第12図 田能北遺跡 L区土坑7出土遺物

の斜面からの雨水などの水を防ぐために掘削された溝と推定している。そのことから、溝の西側に建物などの何らかの施設が存在するものと考えられることから、溝の内側を重点的に検出を試みたが、建物の柱穴などの遺構は検出されなかった。このため溝の内側にどのような施設が存在したかは不明である。溝の内側に柱穴を持たない極小規模な建物（小屋）を想定しているが、確証はない。

土坑12（第4図） 調査区の北西側 $X = -115, 431$ 、 $Y = -37, 236$ 付近で検出した。土坑の西側は調査区外にある。調査当初は土坑と認識して掘削したが、地形的に観て丘陵縁部に存在し、平面形も歪な形を呈することから、丘陵端部の埋積谷の可能性が高い。

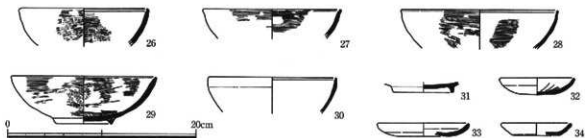


土坑内からは、瓦器椀、土師器小皿（第14 第13図 田能北遺跡 L区土坑22平面・断面図、図版15-29）などが出土した。瓦器椀はいずれも屋敷地内の遺構から出土したものより古い型式のもので、形状から桶粟型ないしは丹波型と推定されるもので、11世紀末に比定される。

土墳墓55（第16図、図版6-1・2） 調査区上段の建物1・2の東側、屋敷地より約5m離れた $X = -115, 450.5$ 、 $Y = -37, 233.7$ 付近を中心にして存在する土墳墓である。調査当初は、土墳墓周辺が斜面の変換点に近く、若干の遺物包含層が検出面上面に残存していたため土墳墓という認識で掘削を行えなかった。掘削時に一部の遺物が出土した時点で、土墳墓であると認識した。そのため若干調査不十分な点が生じた。

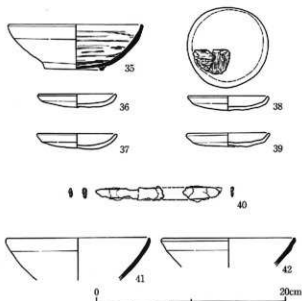
土墳墓の掘り方は、平面形では隅丸長方形に近い形を呈し、最大長1.25m、最大幅1.0m、底辺も隅丸長方形に近く、最大長1.25m、最大幅0.7mを測る。検出面からの深さは、北側で約0.24m、南側で0.45mを測り、底辺は、北側が高く、南側に向かって低くなり、高低差は約0.24m存在する。

土墳墓上面には石材が積まれていたものと推定され、一部が北西辺周辺で検出した（図版6-



第14図 田能北遺跡 L区土坑12出土遺物

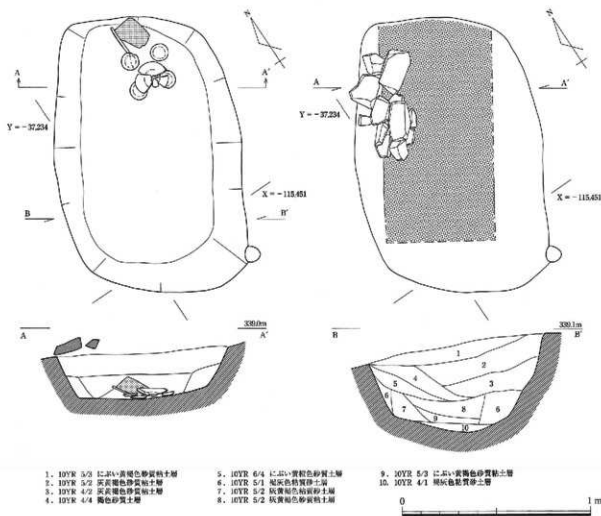
3)。石材は長さ0.07mから0.2m、幅0.05mから0.13m、高さ約0.05m前後の直方体に近いものが多く用いられている。石材は一部のみの残存ではあるが、その形状から土壌辺に沿って長方形に配置していたものと推定される。棺は木棺と推定され、土壌低部に一部木質が確認（第15-38図、図版16-38）された。釘が出土していないため組合式木棺に近い形と推定される。棺の規模は、土層断面、一部残存していた土壌墓土上の平面観察及び遺物の出土状況などから、長さ1.15m、幅0.58m前後のものとして推定される。



第15図 田能北遺跡 L区土壌墓55出土遺物

遺物（図版6-4）は、北辺中央周辺に集中して土壌低部付近で検出された。

烏帽子（図版6-5）は、北辺壁に立掛けられたように検出された。烏帽子は縁が低部付近に



第16図 田能北遺跡 L区土壌墓55平面・断面図

あり、頭部が上部にある。烏帽子は、黒漆が表面に塗られていたが、布、紙などの痕跡は全く認められなかった。最大幅約14cm、高さ約8cmを測る。

時代的にみて、折り烏帽子の類と推定されるが、現在の所、X線などの分析を行っていないため形状は不明である。

刀子は、烏帽子の西側下付近でやや重なりあった状況で出土した。刀子は刃先を下に向けて、土壙墓の主軸に対して斜め方向にある。刀子（第15-40図、図版16-40）は、取上時に刃の部分が一部份欠損したが、全長11.6cm、刀部7cm以上、柄部約4.6cmを測る。出土状況図などから全長13.6cm前後と推定される。

土器は、被葬者の頭部と推定される地点から出土した。出土状況は、土師器小皿を4個体棺底部に四角形になるように配置し、その上の中央部付近に瓦器椀が置かれていた。

瓦器椀（第15-35図、図版15-35）は、口径約13.8cm、高さ約4.6cmを測る。底部から口縁部にかけて内湾し、端部はやや段を有する。高台は断面台形に近い形を有する。内面には暗文を有するが、外面には認められない。土師器皿（第15-36~39、図版15-36・37、16-38・39）は口径8.4cm前後、高さ1.4cm前後を測り、底部から口縁にかけて内湾気味に伸びるもの（36、37）、やや外反するもの（38、39）とがある。また、土師器皿（38）底部には、木棺の残片と推定される木片が付着している。

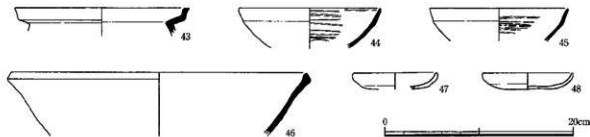
土壙墓の被葬者は、烏帽子を持っていることから男性で、烏帽子の配置状況から西を向くように葬られていたものと推定される。また土壙墓底部の長辺が1.25mと短いことから、被葬者は屈葬に近い形で葬られていたものと推察される。

時期は、出土遺物から中世（13世紀前半）と推定される。

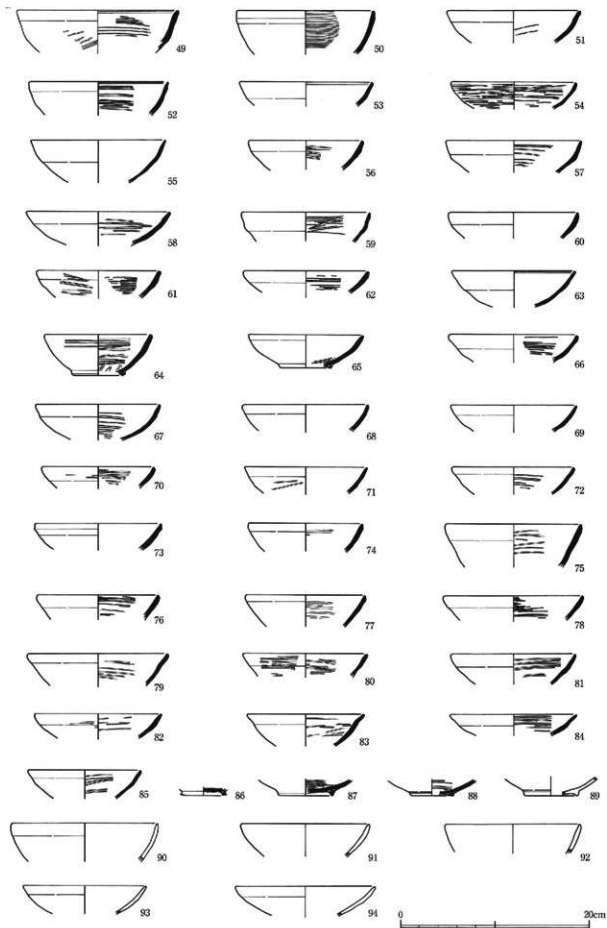
4. 出土遺物

調査区内から出土した遺物包含層出土遺物（第18・19図、図版16-95・108・113、17-104・110・119）のほとんどは、13世紀前半を中心とする時期で、瓦器椀、瓦器皿、土師器椀、土師器皿、青磁椀、青磁皿、白磁椀、須恵器播鉢、瓦器羽釜、土師器羽釜などが出土している。

瓦器椀は、遺構内および遺物包含層中より、楠葉ないしは丹波型と推定される10世紀後半の特徴を持つもの（49-54）、土坑12より11世紀末の特徴を持つ楠葉ないしは丹波型と推定されるもの（第14図26-31）以外は、13世紀前半代と推定される丹波型の瓦器椀で占められる。これらは、



第17図 田能北遺跡 L区遺構内出土遺物（43-S P 1、44-46-S P 38、47-48-S P 49）

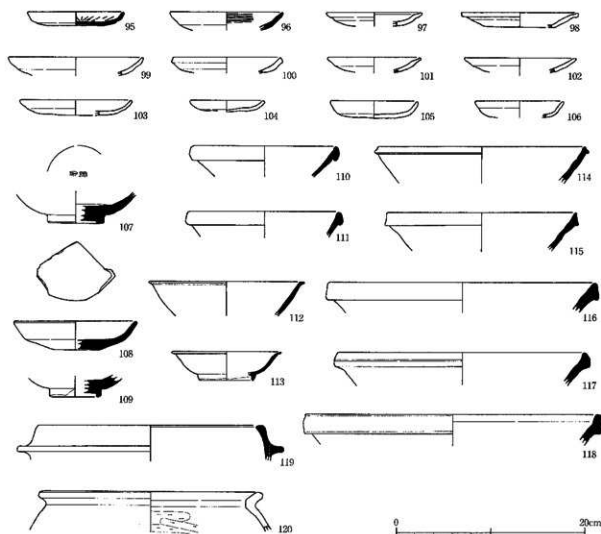


第18図 田能北遺跡 L区包含層出土遺物1

屋敷地内の遺構、屋敷墓から出土した遺物の時期と一致する。これらの特徴は、口径が小さく12cmから14cm前後、高さ4.5cm前後のものが多く認められる。口縁部は断面が丸みを帯びるものが大半であるが三角形に近いもの（73～77）もある。底部から口縁部にかけて内湾気味に上がるものが大半を占めるが、やや直線的に斜めに上がるもの（75～77、85）、内側に屈曲するもの（55、57、59、85）もある。高台は短く貼付高台で断面三角形（87～89）を呈するものが多く認められる。暗文は内外面に認められるものが多いが、内面のみのものも存在する。ただ13世紀前半とした瓦器碗の内、同じ特徴を持つが口径が若干大きく、深いもの（55～58）が存在し、これらは若干時期が遡る可能性がある。

土師器小皿は、全て13世紀前半代に収まるものと推定されるが、口縁部と底部の境に段を有し、口縁部が外上方に伸びるもの（97、98）。底部から口縁部にかけて内湾気味に伸びるもの（99、100）、外上方に直線的に伸びるもの（101、102）。底部から口縁部にかけて内湾するもの（103～106）などの特徴が認められる。

青磁は、碗（107、109）、皿（108）がある。107は、特徴から室町時代と推定され、他は13世紀代のものとして推定される。



第19図 田能北遺跡 L区包含層出土遺物 2

白磁碗(110~113)は、110、111は口縁が折れ曲がり、断面が三角形に近い形を呈することからⅣ類、112は口縁が外側に反することからⅤ類に比定される。これらはいずれも13世紀代のものと推定される。ただ113は、形態の特徴から時期が下るものと推定される。

須恵器播鉢(114~118)は、114は12世紀代の特徴、115が14世紀代の特徴を持つ。他は13世紀代と推定される。

第3節 N区の調査

1. 概要(第2・22図、図版7-1)

N区は、今回の調査地域の中では最も東に位置し、東から西に向かって下る丘陵縁辺部の上部に存在する。調査区の東側は、急斜面となり山林となる。西側は水田造成時に削平を受け、段となっている。調査区は、南北長約44m、幅約7mを測り、南北に細長い。調査区面積は約349㎡、調査区の平均の標高は今回の調査区の中では最も高く、345.7m前後を測る。検出した遺構は、屋敷地を囲む溝と推定される溝4本、土坑4基、柱穴多数、櫛列1本、自然流路1本などである。

2. 基本層序(第20図、図版7-2)

調査区は、丘陵斜面を屋敷地を造成する際に削平し、平坦面を造り出している。堆積層は、それ以降に形成されたものと推定され、堆積状況は埋積谷部を除き、ほぼ同様な状況を呈している。

以下、各層の概要を記述する。

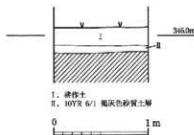
I層 現耕作土層で層厚は、0.2m前後を測る。

II層 褐灰色砂質土を基本とする層で、本調査区の遺物包含層で、中世の遺物を若干含む。層厚0.1m前後を測る。

3. 調査の成果

屋敷地を囲む溝(第22図、図版8-3) 調査区の中央から西側で検出した溝群で4本検出した。溝は大小の違いはあるものの、内部に建物を検出しなかったが、平面形で「コ」の字形ないしは「L」字形に近い形で屈曲していることから屋敷地を区画する溝と判断した。

溝2(第21図、図版7-3) 溝は、調査区中央付近から南側にかけて存在する。溝は、 $X = -115,507$ 、 $Y = -37,150$ 付近から $X = -115,520$ 、 $Y = -37,148$ 付近までの間、長さ約17.5mにわたって丘陵斜面とほぼ並行に南北方向に延びるが、南側の $X = -115,520$ 、 $Y = -37,148$ の地点ではほぼ直角に曲がり、 $X = -115,521$ 、 $Y = -37,150$ の地点で、溝11と重複し取束する。溝の北側は、水田造成時に削平された段に当たり消滅する。溝は幅約0.8m前後、屋敷地内からの深さ約0.1m前後を測る。溝底の高低差からほとんどの水は、北方向に流れていたものと推定される。溝内からは、土師器片が極少量出土したが図化出来なかった。

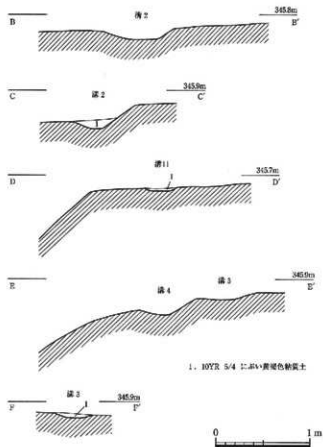


第20図 田能北遺跡 N区基本層序図

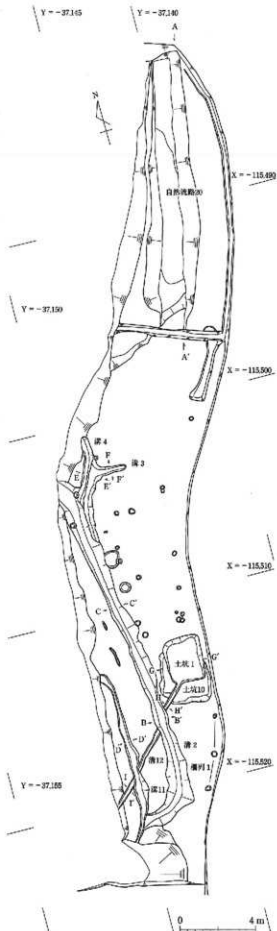
溝11 (第21図、図版7-4) 溝は調査区南側で検出した。溝の北側は、水田造成時の段により $X = -115,517$, $Y = -37,149$ 付近で削平を受けて消滅しており、そこから $X = -115,528$, $Y = -37,149$ 付近までの間、長さ約9mにわたって丘陵斜面および溝2とほぼ並行に南北方向に延びる。南北端は、水田造成時に削平され消滅している。溝は幅約0.2m、深さ約0.05mを測る。溝2との切り合い関係は、精査時の表面観察の結果、溝11が新しい。

溝内からは、遺物は全く出土しなかった。

溝4 (第21図、図版7-7) 溝は調査区中央付近で検出した。溝の北側は、 $X = -115,499$, $Y = -37,149$ 付近で水田造成時に削平を受け、また南側は $X = -115,506$, $Y = -37,149$ 付近で溝2に切られて消滅している。検出長約3.5m、幅約0.4m前後、深さ約0.2mを測る。溝は、内弯していることから、



第21図 田能北遺跡 N区溝断面図

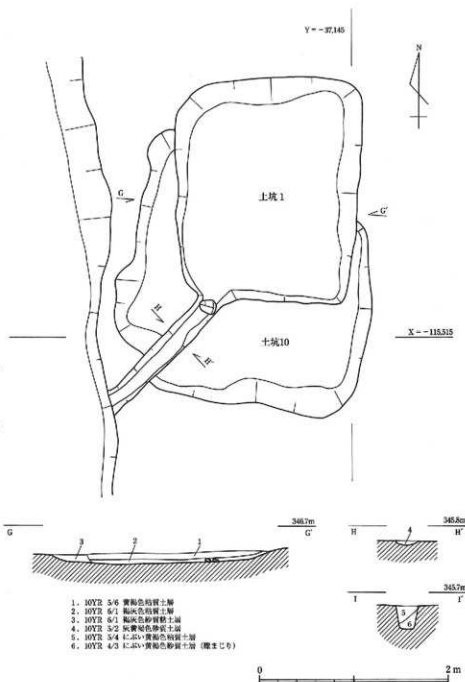


第22図 田能北遺跡 N区平面図

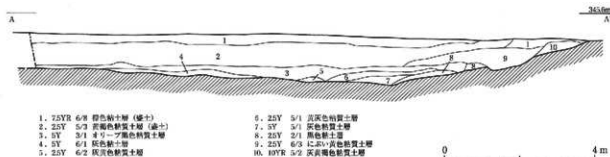
屋敷地のコーナー部と推察される。遺物は溝埋土中より瓦器椀が少量出土している。

溝3（第21図、図版7-5）溝は、調査区中央部分で検出した。溝の南側は溝4と切り合って存在する。溝は山側のX=-115,507、Y=-37,146.5付近が始点でX=-115,507、Y=-37,148付近において直角に曲がり、X=-115,514、Y=-37,149付近で溝2に切られている。

調査当初溝は、水田耕作時に削平され段になっていた付近に存在していたことから埋土を土砂の取り残しと判断して掘削したため、溝4との新旧関係は不明で



第23図 田能北遺跡 N区土坑1・10平面・断面図



第24図 田能北遺跡 N区自然流路20断面図

- | | |
|-------------------------|-----------------------|
| 1. 75YR 6/8 棕色粘土層 (盛土) | 6. 25Y 5/1 灰青色粘質土層 |
| 2. 25Y 5/2 赤褐色粘質土層 (盛土) | 7. 5Y 5/1 灰色粘質土層 |
| 3. 5Y 3/1 4-7-17 灰色粘質土層 | 8. 25Y 2/1 褐色粘土層 |
| 4. 5Y 6/1 灰色粘土層 | 9. 25Y 6/3 に近い灰色粘質土層 |
| 5. 25Y 6/2 灰青色粘質土層 | 10. 10YR 5/2 灰赤褐色粘質土層 |

ある。屋敷を囲む溝と推定され、その内部にいくつかの柱穴を確認したが、建物が建つにはいたらなかった。

土坑1・10(第23図、図版8-1・2) 土坑は調査区の南側 $X = -115,514$ 、 $Y = -37,146$ 付近で検出した。2基の土坑は切り合って存在し、平面および土層断面観察の結果、土坑1が新しい。

土坑1は、平面形では隅丸長方形を呈し、長さ約2.4m、幅約1.9m、深さ約0.1mを測る。土坑の南西端から南西方向に向かって、幅約0.25m、深さ約0.05mから0.25m、断面の形状が「U」字形に近い溝12(図版7-6)が延びる。土坑1埋上中より土師器羽釜の小片が出土したが、図化出来なかった。

土坑10は、平面形では隅丸方形に近い形を呈し、一辺約2.7m、深さ約0.1mを測る。遺物は全く出土しなかった。

2基の土坑の用途は不明だが、土坑1より延びる溝が存在することから、水に関係する施設の可能性が高い。また、両土坑とも検出面からの深さが浅いため、周辺が削平を受ける以前のものと推定される。

欄列1(第22図、図版8-4) 調査区の南東端 $X = -115,519$ 、 $Y = -37,144$ 付近で検出した。欄列は3個の柱穴からなり、丘陵の稜線に沿って存在する。全長約4m、柱間約2m、柱穴は平面形で円形に近く、径約0.2mから0.3m、深さ約0.05mから0.1mを測る。

自然流路20(第22・24図) 調査区北側で検出した。検出面上面から下0.9mの間は、水田造成時と推定される盛土である。南側の肩部は $X = -115,494$ 、 $Y = -37,142$ 付近で、その周辺から流路底に向かって急激に落ち込む。北側は、周辺の状況から北に存在する山の斜面が北辺の肩部になるものと推定される。検出面から流路底部までの深さが1.2mであるため、幅約1.3mのトレンチを設定し、遺構の確認を行った。

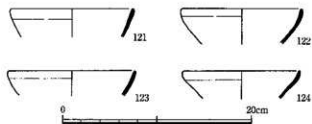
流路は、周辺の遺構の検出状況から、M区からK区北東端(図版8-6・7)で検出した自然流路に繋がるものと推定される。

遺物は、流路内からは全く出土しなかったが、流路南側に存在する屋敷地に伴う遺構群が存在していた頃には流路として機能していたものと推定される。

4. 出土遺物(第25図)

遺構内および遺物包含層から出土した遺物は極めて少ない。図化出来たのは4点の瓦器碗のみである。瓦器碗は、溝4周辺を掘削中に出土したもので、溝内である可能性もある。

口径は半径14cm前後と小さく、底部に向かって直線的に斜めに下るもの(121)と内湾気味に斜めに下るもの(122~124)がある。



第25図 田能北遺跡 N区包含層出土遺物

これらの瓦器碗には内外面とも暗文は認められない。これらの特徴から13世紀後半と推定される。

第4節 O区の調査

1. 概要 (第2・27図、図版9-1)

O区は、北の山塊から南へ下る丘陵縁部端付近に存在する。調査区の西側には田能川が流れている。調査区北側の丘陵上部には、約35m隔ててP区、その上部にはQ区が存在する。

調査区の平均の標高は、340m前後、調査面積は約186㎡を測る。

検出した遺構は、建物1棟、炉跡3基、炉跡に付随する溝1本、耕作溝多数などである。

2. 基本層序 (第26図、図版9-2)

調査区はほぼ平坦で、ほぼ同様な堆積状況を呈している。

以下、各層の概要を記述する。

I層 現耕作土層で層厚は、0.2m前後を測る。

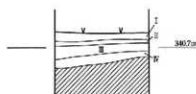
II層 現耕作土層の床土である。層厚は、0.05m前後を測る。

III層 暗褐色粘質土を基本とし、水田造成時の整地土と推定される層である。平安時代、中世の他に、近世の遺物を若干少量含んでいる。層厚0.1m前後を測る。

IV層 灰黄褐色粘質土を基本とする層で、本調査区の遺物包含層である。平安時代および中世の遺物を含む。層厚0.1m前後を測る。

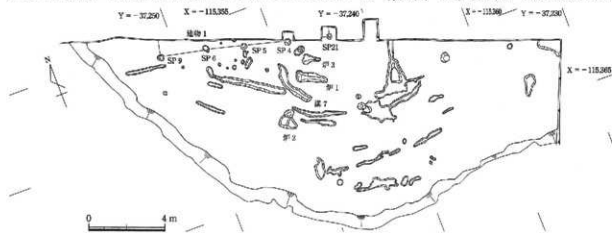
3. 調査の成果

建物1 (第28図、図版9-3、10-1~4) 調査区西側で検出した。建物のほとんどが北側の調査区外に存在し、南の桁行きのみ調査区内にある。桁行きの並びは、ほとんどが直線的に並ぶが、SP9のみが南側に若干ずれている。桁行4間(約9m)、柱間は2mから2.4mを測る。柱穴は、円形に近い形を呈し、径約0.35m前後、深さ約0.2mから0.35mを測る。柱痕は断面観察の結果約0.15mを測る。ま



1. 耕作土
II. SP9 5/2 灰褐色粘質土層(灰土)
III. SP9 4/2 暗褐色粘質土層
IV. SP9 4/2 灰黄褐色粘質土層

第26図 田能北遺跡 O区基本層序図



第27図 田能北遺跡 O区平面図

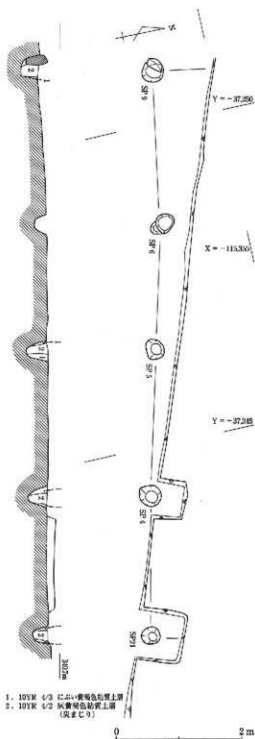
た、SP9には、柱穴堀方内に長さ約0.35m、幅約0.25m、厚さ約0.15mの石によって、柱を支えるように置かれていた。柱穴内からは、SP6内より図化は出来なかったが、須恵器壺体部片、また、SP5より鉄滓の薄片が出土している。

炉跡群（図版10-5） 調査区中央より西 $X = -115,360$ 、 $Y = -37,244$ 付近を中心として検出した。炉跡群は、3基の炉跡とそれに付随する溝とからなる。炉跡1、炉跡2を検出した地点周辺は、他より検出面が0.05mから0.1m程度高い位置にある。

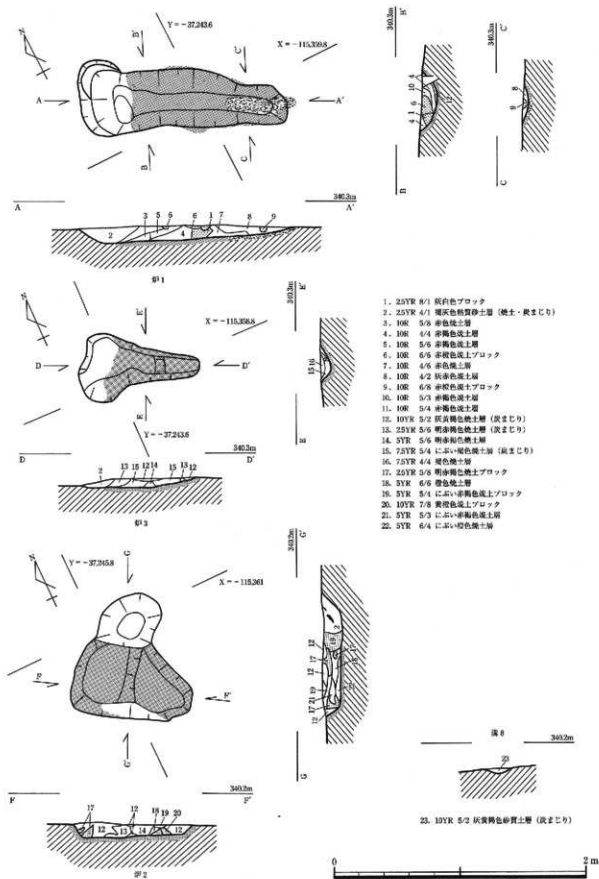
溝7（第29図） 溝は炉1、炉2の西南部付近を取り囲むように内弯し、 $X = -115,359$ 、 $Y = -37,244$ 付近から $X = -115,361$ 、 $Y = -37,245$ 付近にかけて存在する。検出長約2.6m、幅約0.2mから0.4m、深さ約0.1mを測る。

炉1（第29図、図版10-6・7、11-1~3） 調査区の中央 $X = -115,359.7$ 、 $Y = -37,243.6$ 付近を中心とする。全長約1.64m、幅は、焚口付近で約0.6m、燃烧部入口付近で0.45m、煙道と推定される先端付近で0.2mを測り、平面形では隅丸長方形に近い形を呈する。先端と焚口の高低差は、約0.13mを測る。土層および平面観察の結果、燃烧部は、焼土ブロックおよび赤褐色に変色した焼土が堆積していたことから、天井を覆っていた焼土が崩落したものと推定される。また焚口付近は、燃烧部の土砂が崩落した後に褐色粘質砂土（焼土、炭まじり）が堆積していることから、使用時には開いていたものと推定される。燃烧部の底面から壁面のほとんどは、地山面が焼けて赤褐色を呈している。ただ煙道付近と推定される先端部の一部は、他の地点より高温であったものと推定され、褐色に変色している。炉跡内からは全く遺物は出土しなかった。

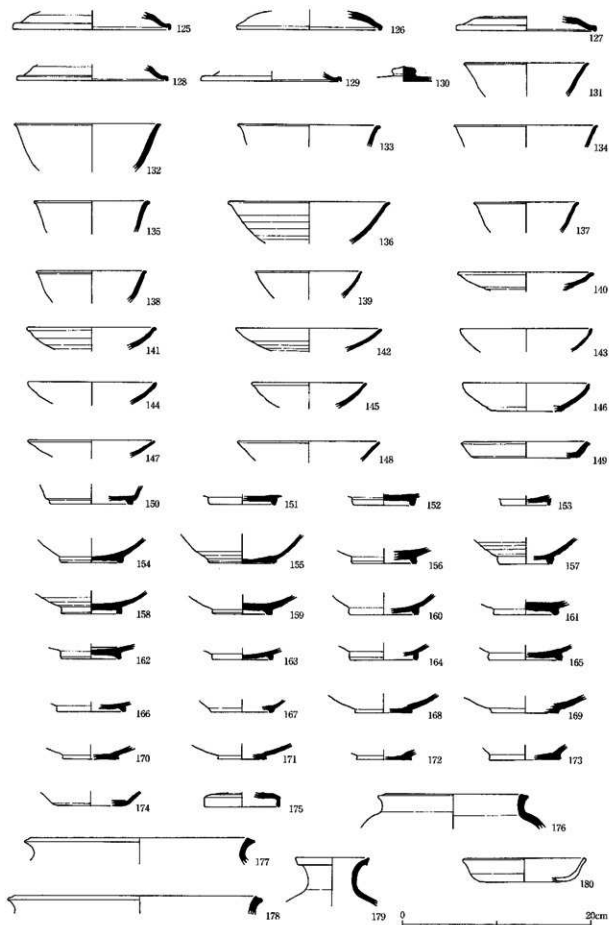
炉3（第29図、図版11-8~10） 調査区の中央 $X = -115,358.8$ 、 $Y = -37,24.5$ 付近を中心とする。南側約0.4m離れて炉1が存在する。全長約0.95m、幅は焚口付近で約0.55m、燃烧部入口付近で0.5m、煙道と推定される先端付近で0.1mを測り、平面形では隅丸三角形に近い形を



第28図 田能北遺跡 O区建物1平面・断面図



第29図 田能北遺跡 O区炉跡群平面・断面図



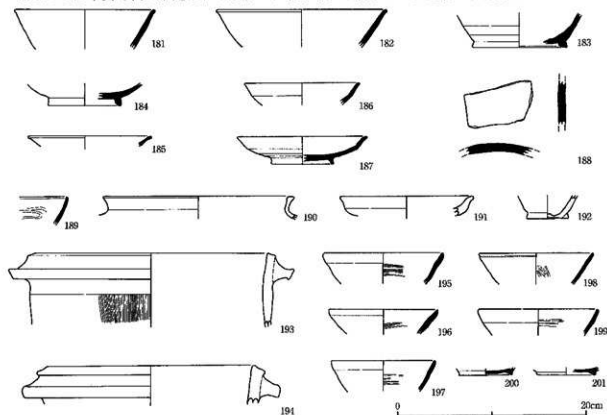
第30图 田能北遺跡 O区包含層出土遺物 1

呈する。先端と焚口の高低差は、約0.13mを測る。土層および平面観察の結果、燃烧部は焼土ブロックおよび赤褐色に変色した焼土が堆積していたことから、天井を覆っていた焼土が崩落したものと推定される。また焚口付近は燃烧部の土砂が崩落した後に褐色粘質砂土（焼土、炭まじり）が堆積していることから、使用時には開いていたものと推定される。燃烧部の底面から壁面のほとんどは、地山面が焼けて赤褐色を呈している。炉跡内からは遺物は全く出土しなかった。

炉2（第29図、図版11-4~7） 調査区の中央付近X=-115,360.5、Y=-37,245.8付近を中心とする。北側に約1.5m離れて炉1が存在する。平面形では炉1、炉2とは異なり歪な形状を呈する。炉の北西側に焚口と推定される平面形で円形に近い土坑状のものが存在し、南側には燃烧部が存在する。燃烧部の南辺は直線に近い形状を示し、煙道と推定される地点は三角形に近い。全長約1.9m、焚口付近で径約1.1m、燃烧部入口付近で幅約0.5m、煙道と推定される先端付近で0.1mを測る。深さは焚口付近で約0.15m、燃烧部の焚口付近では約0.14m、煙道付近で約0.12mを測り、炉底部の高低差が約0.02m程度存在する。土層および平面観察の結果、燃烧部は、焼土ブロックおよび赤褐色に変色した焼土が堆積していたことから、天井を覆っていた焼土が崩落したものと推定される。また焚口付近は、燃烧部の土砂が崩落した後に褐色粘質砂土（炭まじり）が堆積していることから、使用時には開いていたものと推定される。燃烧部の底面から壁面のほとんどは、地山面が焼けて赤褐色を呈している。形状から炉1、炉2とは異なる用途である可能性が高い。

4. 出土遺物（第30、31図、図版17-2、16-142・187・180、18-1）

ほとんどが平安時代と推定される遺物で、若干中世が含まれる。遺物は、遺構内から出土した



第31図 田能北遺跡 O区包含層出土遺物2

ものは僅かで、種類は、須恵器、土師器、緑釉陶器などである。

須恵器は、杯蓋（125～130）、杯身（131～139、150）、皿（140～149）、壺（179）、壺蓋（175）、甕（176～178）などである。

杯蓋は口径7cm前後のものが多く、口縁が屈曲し端部を丸く取めている。天井部が平らに近いもの（125、127、128）、丸みを帯びるもの（126）とがある。天井部付近は、丁寧なヘラケズリを施しているものが多い。

杯身は、口縁端部が外に張り出すもの（133～138）、口縁端部を丸く取めるもの（131、139）の2種がある。底部から口縁にかけて外上方に直線的に伸びるもの（131～134）と内湾気味に伸びるもの（136～139）とがある。

皿は、底部から内湾気味に外上方に長く伸びるもの（141～146）。底部から外上方に向かって直線的に伸びるもの（147、148）。底部から外上方に向かって直線的に伸び、底部と口縁端部の距離は短いもの（149）。

杯身、皿と推定される底部には様々な形態が確認された。底部が直線的に近いもの（151～153）は、形態の特徴から杯身である可能性が高い。

底部に高台を持ち、底部から屈曲を伴わず、内湾気味に口縁部に至る形態には2種がある。口縁部に向かって斜め上方に伸びるもの（154～164）と口縁部に向かって大きく開き伸びるもの（165～167）があり、前者は形態の特徴から言えば碗に近い杯身、後者は皿の類と推定される。

底部に糸切り痕が確認されたもの（168～173）は、口縁部に向かって大きく開き伸びるものが多く認められる。形態からいえば皿の類と推定される。しかし、173のように口縁部に向かって斜め上方に伸びるものも認められ、杯身と推定される。

甕（176～178）は、口縁端部は角張り、口縁から体部にかけて「く」の字形に屈曲している。

壺（179）は、口縁端部は、断面三角形に近く、口縁から体部にかけて「く」の字形に屈曲している。

緑釉陶器は、碗（181～184）、皿（185～187）、壺（188）がある。これらのほとんどは洛西産と推定され、壺のみ洛北産である。

また、調査地区内で1点のみ黒色土器（189）を確認している。

これらの土器の特徴から時期は9世紀代と推定され、新しくても10世紀前半までと考えている。

第5節 まとめ

田能地区内の圃場整備に伴う発掘調査は、今年度をもって一応終了した。これまで文献のみで明らかにされなかった、平安時代末から中世にかけての地域内の状況が、発掘調査によって考古学の上からでも明らかになった。

田能地区に人々が居住し始めたのは、平安時代初期（9世紀前半）と推定される。平成13年度の田能北遺跡のI地区の調査で検出した建物1棟である。平面形で方形に近い柱穴を伴い、梁間

1間(2.2m)以上、桁行2間(4.8m)以上を測る建物である。現在の所、縄文時代の石器を検出した平成11年度に調査を行った田能城跡を除き、これより古いものは検出されていない。

平安時代前半(9世紀代)になると、今年度調査を行ったO地区で検出した平安時代前半(9世紀代)と推定される建物1棟と炉跡群である。建物は、梁間は調査区外にあり不明であるが、桁行4間(約9m)を測る。

平安時代中期になると、田能南遺跡D地区で検出した屋敷跡がある。母屋と推定される梁間1間(約3.5m)、桁行5間(約10.05m)と梁間1間(約2.4m)、桁行2間(約3.4m)の建物2棟および炉跡からなる。

平安時代後期になると、平成13年度に実施した田能北遺跡E地区で検出した平安時代後期と推定される梁間1間以上(2.5m)、桁行5間(約12.2m)の建物1棟がある。

平安時代末から中世にかけてでは、平成12年度の神宮寺西遺跡で検出した屋敷跡と推定される2棟からなる建物を挙げる事が出来る。屋敷跡は、梁間1間(約4m)、桁行3間(約7.5m)の母屋と推定される建物と梁間1間(約2.5m)、桁行1間(約3.1m)の建物からなる。

中世になると、丘陵縁辺部において、遺物は量の違いはあるもののほぼ全域で認められる。遺構としては、平成11年度に調査を行った田能城跡の屋敷地、平成13、14年度に調査を行った田能北遺跡を挙げる事が出来る。特に14年度に行ったL地区においては、櫻船神社の棟札に記載されていた住人を彷彿とさせる面積(約315㎡)を持つ屋敷地および屋敷墓を伴う建物群が検出されている。

これらのことから、奈良時代末から中世に至るまで、田能地域の遺構は連綿と続いていることが確認された。しかし、これら遺構を検出した地域は、丘陵縁辺部を中心として拡がっているが、遺構の密度としては薄く、丘陵縁辺部でも遺構が存在しない地区もある。また、同時期の遺構は重複する場合は多いが、遺構の時期が重なる場合は極めて少ない。これらのことから、時代を通じてこの小盆地内に居住している人々が少なく、散村という風景を醸し出していたものと推定される。

以上のように田能盆地内の遺跡の在り方をみてきたが、これらの調査成果と文献史料とのすり合わせが部分的にはあるが田能盆地全域にわたって発掘調査を行ったことにより、以前より可能となり、古代から中世に至る集落構造が明らかになるものと考えている。今後の調査、研究に期待したい。

参考文献

- 1) 大阪府教育委員会「田能地区遺跡確認調査概要」 2000
- 2) 大阪府教育委員会「田能遺跡群発掘調査概要・Ⅱ」 2001
- 3) 大阪府教育委員会「田能遺跡群発掘調査概要・Ⅲ」 2002

第3章 中畑地区遺跡確認調査

第1節 はじめに

遺跡確認調査を実施した高槻市大字中畑地区（第32図）は、大阪府の北東端部、北を京都府亀岡市、東を京都府京都市西京区と接している。中畑地区内の遺跡については、今回の遺跡確認調査で新たに遺跡が発見される以前には、全く遺跡が確認されていなかった。しかし、発掘調査を実施している田能地区と接し、東西0.7km、南北0.2kmの狭い盆地ながら、遺構が存在する可能性が高い地形をしていることから、遺跡が存在する可能性が高いと判断した。この状況に基づき、本府環境農林水産部と協議を実施し、遺跡の有無を確認するため、まず遺跡確認調査を実施することとなった。

圃場整備対象地域全域に遺跡の有無を確認するため、基本的に約2m×2m、深さ約0.6mの試掘トレンチを23箇所設置して遺跡の有無を確認した。試掘トレンチの設置箇所の多くは、遺跡の存在する可能性が最も高いと考えられる丘陵縁辺部に設置し、部分的に谷部などにも配置した。調査の方法は、全て人力により、埋積谷と推定される地点を除き、地山相当層まで掘削し、遺構・遺物の有無を確認した。

これらの試掘トレンチを設置した地区毎に、中畑北地区、中畑西地区、中畑南地区、中畑東地区と大まかに区分し調査を行った。この結果、基本的に圃場整備予定地内の4地区において遺跡が存在することを確認した。

第2節 調査の概要

1. 中畑北地区（図版12-1、13-1・2）(1)

圃場整備対象地域内の中で、最も北の奥まった地区に位置する。北の山塊から南西方向に派生する狭い丘陵上を中心とする。設置した試掘トレンチは、No1 トレンチのみであるが、地山相当層上面には、遺構が検出されなかったものの、掘削土の灰黄褐色土中より多量の遺物（第35-202、図版18-202）が出土した。

トレンチ周辺の地形は、他と比較して丘陵が最も緩やかに下っている地点であり、東西約55m、南北約20mの狭い範囲に遺構・遺物が検出されるものと判断した。

2. 中畑西地区（図版12-2、13-3・4・7・8）(2)

中畑地区の西側、北東の山塊から派生する丘陵の縁辺部周辺を中心とする。No2・3・4・7・8・10の6箇所に試掘トレンチを設置した。

No2 トレンチ 出土遺物は瓦器1片のみで、地山相当層上面にも遺構は存在しなかった。しかし、地山直上層が遺物包含層の特徴である土色が褐色を呈していたことと、周辺の地形が緩やかな斜面であることから、遺構・遺物が検出される可能性が高いものと判断した。



第32図 中畑地区遺跡確認調査トレンチ及び遺跡範囲図

No3トレンチ 地山相当層上面には遺構は存在しなかったが、地山直上層の土色が褐色を呈し、少量であるが遺物（第35-203図、図版18-203）が出土したことから、遺物包含層の可能性が大であると判断した。この地点では遺構は検出されなかったが、周辺において遺構が検出されるものと判断した。

No7トレンチ 地山相当層上面に多数の柱穴などの遺構、遺物包含層である褐色粘質土層中より、多量の遺物（第35-204~208・214図、図版18-205~208・214）が出土したため、遺跡の範囲内であると判断した。

No4・8トレンチ 耕作土下地山相当層まで近代と推定される盛土層で、盛土層中に中世から近代に至る遺物が若干含まれているのみで、地山相当層にも遺構は存在しなかった。地元の人の話によると、この周辺において、瓦用の粘土を採取したということであった。このことから本来は、周辺状況から遺跡の範囲に含まれていたものと推定されるが、上記の理由により遺構が削平されたものと考えられる。

No10トレンチ 耕作土下0.4mまで瓦用粘土採取後と推定される盛土層が認められるが、それ以下の層は堆積状況から旧状をなしていたものと推定される。遺物は若干出土したが、土層が灰黄色ないしは灰色粘土で湿地帯の様相を呈していたことと、トレンチ北側に存在する丘陵が谷部にあたっていたことから埋積谷の可能性が高く、遺構は存在しないものと判断した。

これら試掘トレンチの調査結果に基づき、中畑西地区においての圃場整備予定地内での遺跡の範囲は、別添図に示す東西約220m、南北約50mの範囲と推定される。しかし、周辺の地形から判断すると、遺跡推定範囲の北側、丘陵縁辺部に存在する現集落にまで遺跡の範囲が及ぶものと推測される。

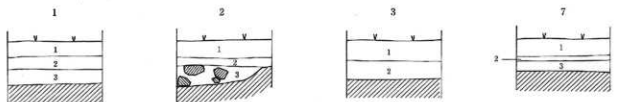
3. 中畑南地区（図版13-5・6・9~12、14-1~4）(3)

中畑地区の南側、南の山塊から北に下る丘陵縁辺部を中心とする地区である。No5・6・9・11・12・13・14・21・23の9箇所にトレンチを設定した。

No5・6トレンチ 設定した箇所は、当初は地形的には丘陵縁辺部であることから、遺構・遺物が検出される可能性が高い地点と考えられたが、現耕作土から地山相当層まで0.3m前後と浅く、遺物包含相当層も検出されなかった。耕作土中より少量の遺物が出土したが、地山相当層上面に遺構が検出されなかったため、この周辺には遺跡が存在しないものと判断した。

No9トレンチ 丘陵縁辺部より下段に設置したトレンチである。遺物は少量出土したが、土層が遺物包含層の特徴である褐色を呈していなかったこと、地山相当層に遺構が検出されなかったこと、地形的に見てトレンチを設置した箇所が、遺構が存在する可能性が最も高い丘陵縁辺部ではないことなどから、この周辺に遺構は存在しないものと判断した。

No11トレンチ 周辺の地形から、南南西から北西に下る低い丘陵上に設定したトレンチである。地山相当層上面には遺構が検出されなかったが、遺物（第35-209図、図版18-209）は、遺物包含相当層から比較的多く出土したことから、この周辺に遺構が存在する可能性が高いものと判断



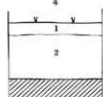
1. 耕作土
2. 10YR 6/6 明灰色粘質砂土層
3. 10YR 5/2 灰褐色粘質砂土層

1. 耕作土
2. 7.5YR 5/6 明棕色土層 (床土)
3. 7.5YR 4/1 灰褐色粘質土層

1. 耕作土
2. 10YR 5/3 灰褐色粘質砂土層

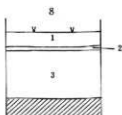
1. 耕作土
2. 7.5YR 6/8 明棕色土層 (床土)
3. 7.5YR 4/4 棕色粘質土層

北地区



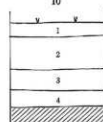
1. 耕作土
2. 腐土

西地区



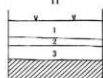
1. 耕作土
2. 7.5YR 6/1 黄褐色粘質土層 (床土)
3. 腐土

10



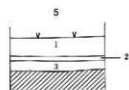
1. 耕作土
2. 腐土
3. 2.5YR 6/2 灰黄色粘土層
4. 5Y 5/1 灰黄色粘土層

11

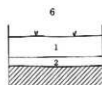


1. 耕作土
2. 7.5YR 6/6 明棕色土層 (床土)
3. 10YR 3/1 黄褐色粘質砂土層

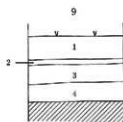
南地区



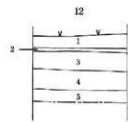
1. 耕作土
2. 7.5YR 5/1 黄褐色粘質土層 (床土)
3. 7.5YR 5/2 灰褐色粘質砂土層



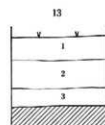
1. 耕作土
2. 5Y 6/2 オリーブ黄色粘質砂土層 (床土)



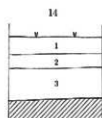
1. 耕作土
2. 7.5YR 5/8 明黄色土層 (床土)
3. 10YR 5/3 灰褐色粘質砂土層
4. 7.5YR 5/9 明黄色粘質砂土層



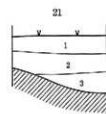
1. 耕作土
2. 7.5YR 5/6 明棕色土層 (床土)
3. 10YR 5/2 灰褐色粘質砂土層
4. 10YR 5/3 灰褐色粘質砂土層
5. 5Y 5/1 灰黄色粘土層



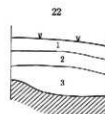
1. 耕作土
2. 7.5YR 5/5 明黄色粘質砂土層
3. 10Y 6/1 灰褐色粘質砂土層



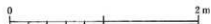
1. 耕作土
2. 7.5YR 4/4 黄褐色粘質砂土層
3. 10YR 6/5 明黄色粘質砂土層



1. 耕作土
2. 7.5YR 5/3 明黄色土層 (床土)
3. 2.5Y 4/1 黄褐色粘質砂土層



1. 耕作土
2. 10YR 5/6 灰褐色粘質砂土層
3. 10YR 4/2 灰褐色粘質砂土層



第33図 中畑地区遺跡確認調査トレンチ断面図1

した。

No12トレンチ 耕作土下、0.7mまで掘削したが、地山相当層には達しなかった。また、掘削土の最下層が灰色粘質土で、湿地帯の様相を呈していたため、周辺の地形から、南南西から北北東に下る埋積谷が存在するものと判断した。遺物（第35-210・211、図版18-210・211）は、周辺に遺跡が存在するものと推定され比較的多く出土した。

No13トレンチ 遺物は、瓦器、土師器などが若干出土したが、土層が灰黄色ないしは灰色粘土で湿地帯の様相を呈していたことと、トレンチ北側に存在する丘陵が谷部にあたっていたことから、埋積谷の可能性が高く、遺構は存在しないものと判断した。

No14トレンチ 中畑川の氾濫源と丘陵縁辺部の境目に設置した。遺物は極少量出土するものの、地山相当層上面に遺構が存在していなかったこと、土層が褐色を呈していなかったことから、この周辺には遺構は存在しなかったものと判断した。

No21トレンチ 遺物は全く出土しなかった。地山相当層は、西側に粘質土、東側に砂層が堆積している。この状況から、この周辺は中畑川の氾濫源と推定される。

No23トレンチ 南西から北東に延びる丘陵の縁辺部に設置したトレンチである。遺物は若干出土するものの遺構は全く検出されなかった。周辺の状況から出土した遺物は、同一丘陵上段からの流れ込みと推定され、この周辺にまでは遺構が及んでいないものと判断した。

これらの試掘トレンチの状況から、中畑南地区において遺跡が存在すると考えられるのは、図に示したNo11トレンチ周辺のみであり、圏場整備予定地内での遺跡範囲は限られているが、周辺の地形から南西側の集落周辺にまで及ぶものと推定される。

4. 中畑東地区（図版12-3、14-5～12）(4)

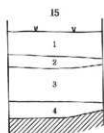
中畑東地区は、中畑川の東側、東の山塊から西に下る丘陵縁辺部周辺を中心とする地区である。No15・16・17・18・19・20の6個所に試掘トレンチを設定した。

No15トレンチ 丘陵縁辺部の北西側に設定したトレンチである。耕作土層下層から地山相当層上層までの土の色調は、遺物包含層の特徴である褐色を呈していたことと、地山相当層上面に遺構が存在しなかったが、遺物が比較的多く出土したことから、周辺に遺構が存在する可能性が高いものと判断した。

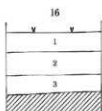
No16トレンチ 丘陵縁辺部中央下段付近に設置したトレンチである。地山相当層上面からは、遺構は検出されなかったが、上層の灰褐色砂質粘土層中より比較的多くの遺物が出土したことにより、遺跡の範囲に含まれるものと判断した。

No17トレンチ 丘陵縁辺部中央付近に設置したトレンチである。当該地点は、埋積谷の縁辺付近にあっているものと推定され、耕作土上面から地山相当層に達するまで、約1.0mと深い。地山相当層上面には、柱穴と推定される遺構、掘削土中より遺物（第35-212・213、図版18-212・213）が多量に出土したことから、遺跡の範囲内に含まれるものと判断した。

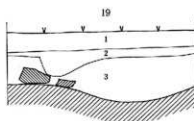
No18トレンチ 丘陵縁辺部西側の段丘直上に設定したトレンチである。耕作土上面から地山相



1. 耕作土
2. 7SYR 6/8 褐色土層 (灰土)
3. 10YR 6/6 褐色砂質粘土層
4. 10YR 5/4 に近い黄褐色砂質粘土層

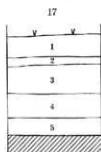


1. 耕作土
2. 7SYR 5/6 暗褐色砂質粘土層
3. 7SYR 5/2 灰褐色砂質粘土層

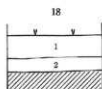


1. 耕作土
2. 7SYR 6/6 褐色土層 (灰土)
3. 7SYR 4/3 褐色粘質土層

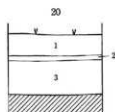
東 畑 区



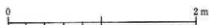
1. 耕作土
2. 7SYR 5/6 暗褐色土層 (灰土)
3. 10YR 5/3 に近い黄褐色砂質粘土層
4. 10YR 4/3 に近い黄褐色砂質粘土層
5. 10YR 5/1 暗褐色砂質粘土層



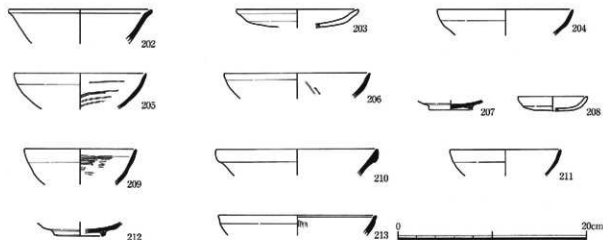
1. 耕作土
2. 10YR 5/4 に近い黄褐色砂質粘土層



1. 耕作土
2. 10YR 6/8 明黄褐色土層 (灰土)
3. 10YR 5/2 灰黄褐色砂質粘土層



第34図 中畑地区遺跡確認調査トレンチ断面図2



第35図 中畑地区遺跡確認調査出土遺物

当層までの深さが約0.4mと浅く、掘削土中には極少量の遺物が出土したのみで、地山相当層上面にも遺構が検出されなかったことから、この周辺にまで遺跡は及んでいないものと判断した。

No19トレンチ 丘陵緑辺部西端の段丘直上に設定したトレンチである。地山相当層上面には、周辺の石材を肩部に配置した、径約1.5m、深さ約0.5mの土坑が検出された。土坑内からは、多量の遺物が出土した。このことから、遺跡の範囲内であると判断した。

No20トレンチ 丘陵緑辺部東側端付近に設定したトレンチである。耕作土下から地山相当層上面までの間には、水田造成時の盛土と推定される灰黄褐色砂質粘土が堆積し、層中より中世の遺物が極少量出土している。地山相当層上面にも遺構は検出されなかったことから、遺跡の範囲外と判断した。

これらの結果から、圃場整備予定地内の遺跡の範囲は南北約200m、東西約50mと推定される。しかし、周辺の地形から判断すると遺跡推定範囲の東側、丘陵上に存在する現集落にまで遺跡の範囲が及ぶものと推測される。

第3節 まとめ

中畑地区は、今回の遺跡確認調査を行う以前は、全く遺跡が確認されていなかった地域であった。今回中畑地区の圃場整備事業に伴い、予定地内の遺跡確認調査を実施したが、予想以上に予定地内に遺跡が存在することが明らかとなった。これら調査結果に基づき、中畑地区においての圃場整備予定地内での遺構・遺物が検出される範囲は、中畑北地区を除き、地区内に存在する3箇所の丘陵緑辺部を中心として4地区に別れていることが明らかとなった。しかし、周辺の地形から判断すると、推定範囲の東側、丘陵中段付近のやや急な斜面上に存在する現集落にまで、遺跡の範囲が広がるものと予測される。それ以外の地区は、若干の遺物は出土するものの、土層、遺物量、遺構の有無などにより遺構は存在しないものと判断した。

これらの遺跡の中心とする時期は、出土遺物から中世と推定され、おおまかに13世紀から14世紀に比定される。

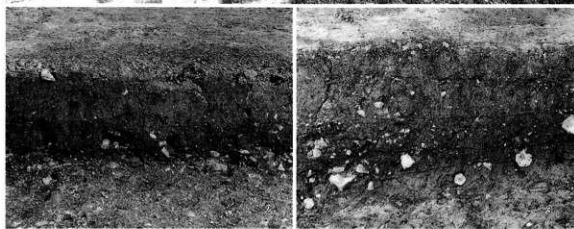
これらの調査結果に基づき、遺跡分布図による遺跡の範囲は、高槻市教育委員会との協議の上、現集落を含めた範囲で大きく括ることとし、遺跡名を中畑遺跡とした。

圖 版

図版1
田能北遺跡 L区

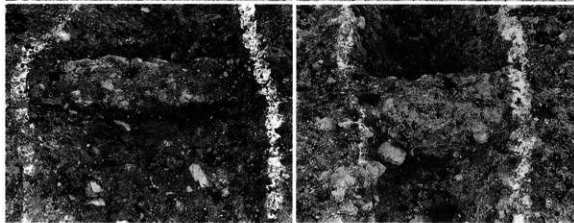


1. L区全景 (南より)



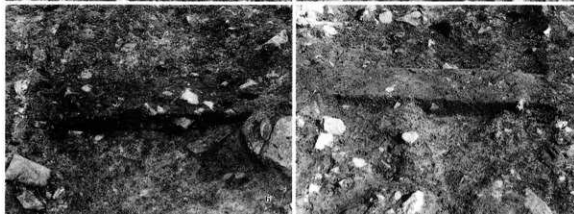
2. L区基本層序1
(西より)

3. L区基本層序2
(南より)



4. 溝9断面1 (西より)

5. 溝9断面2 (西より)



6. 溝2断面M (南より)

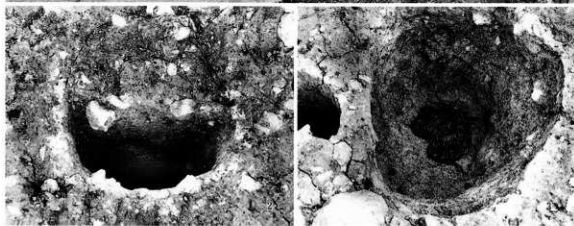
7. 溝2断面K (西より)



1. 建物1・2 (西より)

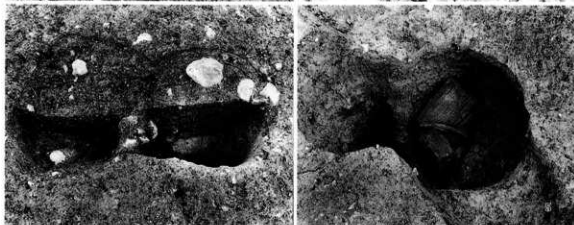
2. 建物1 SP24断面
(東より)

3. 建物1 SP24柱根
(西より)



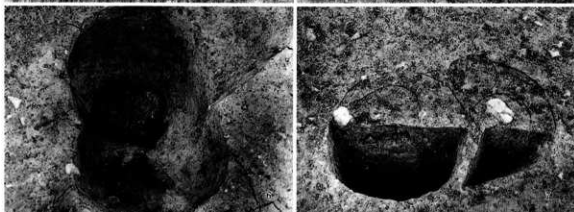
4. 建物1
SP16・17断面
(南より)

5. 建物1
SP6 遺物出土状況
(北より)



6. 建物1 SP6 根石
(東より)

7. 建物1
SP13・14断面
(北より)



図版 3

田能北遺跡 L区

1. 建物 1
SP14柱根 (西より)

2. 建物 1
SP15断面 (西より)

3. 建物 2
SP30断面 (北より)

4. 建物 2
SP33断面 (北より)

5. 建物 2 SP33柱根
(北より)

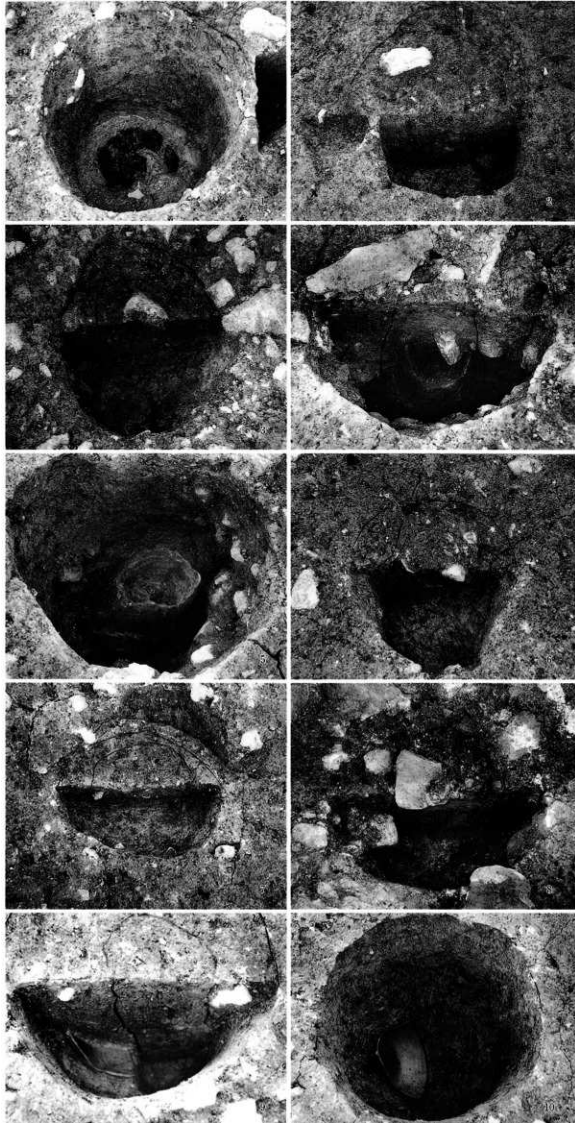
6. 建物 2 SP31断面
(西より)

7. 建物 2 SP32断面
(南より)

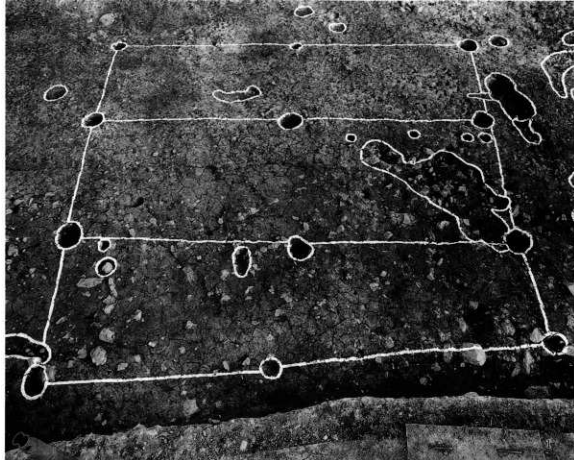
8. 建物 2 SP18断面
(東より)

9. 建物 1
SP21断面 (西より)

10. 建物 1
SP21遺物出土状況
(西より)



図版4
田能北遺跡 L区



1. 建物3 (西より)



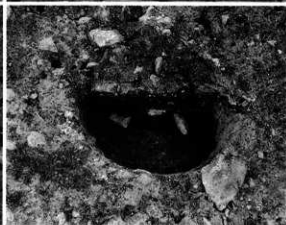
2. 建物3
SP51断面 (南より)



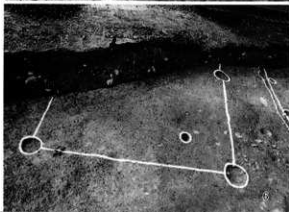
3. 建物3
SP40断面 (北より)



4. 建物3
SP42断面 (南より)

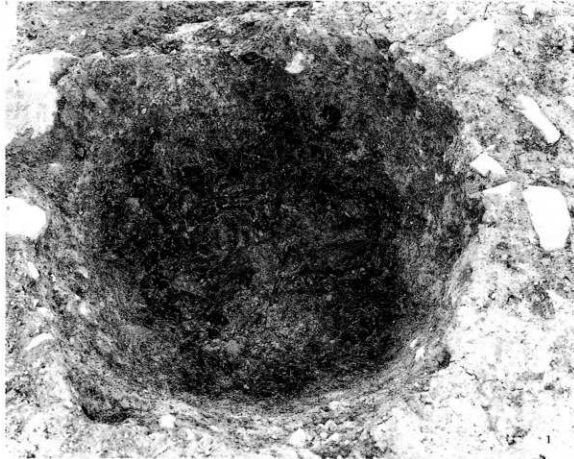


5. 建物3
SP43断面 (南より)

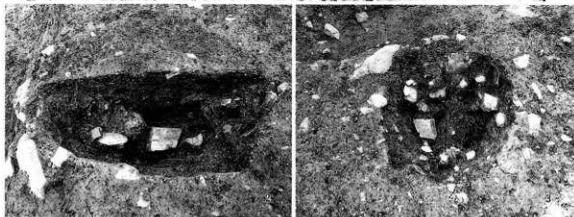


6. 建物4 (北より)

1. 土坑7 木炭検出状況
(東より)



2. 土坑7 断面 (南より)
3. 土坑7 遺物出土状況
(東より)



4. 土坑22 全景 (南より)



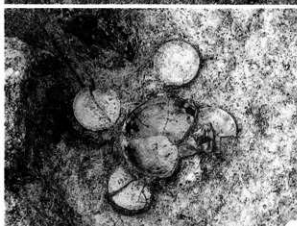


1. 土塚墓55 (南より)



2. 土塚墓55断面 (南より)

3. 土塚墓55
上面石材検出状況
(南より)



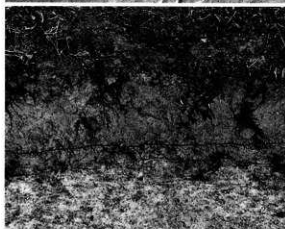
4. 土塚墓55遺物出土状況
(南より)

5. 土塚墓55
烏帽子出土状況
(南より)



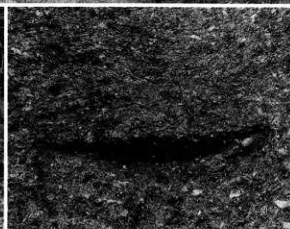


1. N区全景 (南より)



2. N区基本断面 (西より)

3. 溝2断面 (南より)



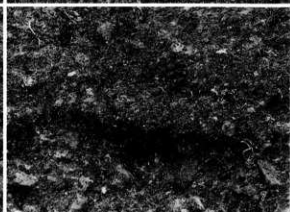
4. 溝11断面 (南より)

5. 溝3断面 (南より)



6. 溝12断面 (南より)

7. 溝4断面 (南より)



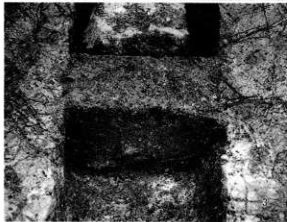
図版 8

田能北遺跡 N・K区

1. N区 土坑1・10
(南より)
2. N区 土坑1・10断面
(南より)



3. N区 溝2断面
(西より)
4. N区 欄列1
(南より)



5. K区全景 (北西より)

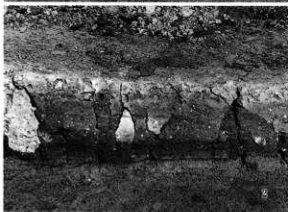


6. K区 自然流路
(西より)
7. K区
自然流路断面 (西より)





1. O区全景 (東より)



2. O区基本断面 (南より)



3. O区建物1 (南より)

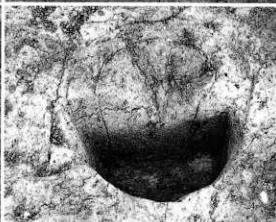
図版10

田能北遺跡 O区

1. 建物1
SP5断面(南より)
2. 建物1
SP5遺物出土状況
(南より)



3. 建物1
SP4断面(南より)
4. 建物1
SP21断面(南より)



5. 炉跡群(西より)



6. 炉1(西より)
7. 炉1上面焼土
(西より)



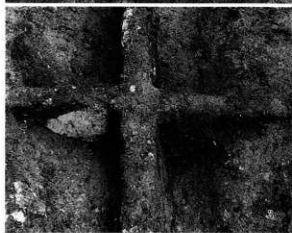
図版11

田能北遺跡 O区

1. 炉1断面A (南より)
2. 炉1断面C (西より)



3. 炉1断面B (西より)
4. 炉2 (西より)



5. 炉2上面焼土
(西より)
6. 炉2断面F (南より)



7. 炉2断面G (西より)
8. 炉3 (西より)



9. 炉3断面D (南より)
10. 炉3断面E (西より)





1. 中畑北地区 (南西より)

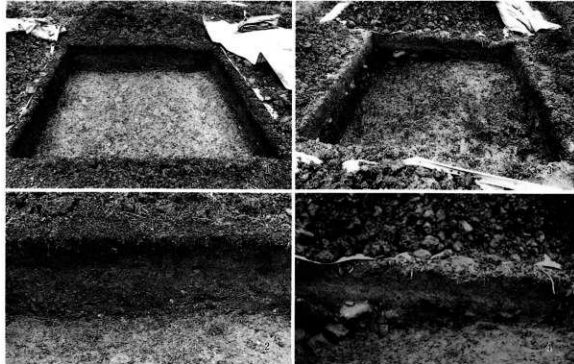


2. 中畑西地区 (南東より)



3. 中畑東地区 (西より)

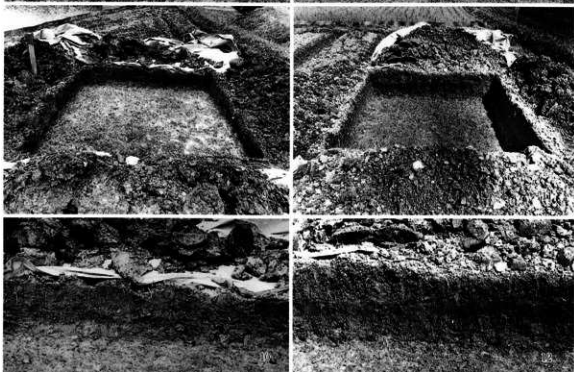
1. No1トレンチ
2. No1トレンチ断面
3. No2トレンチ
4. No2トレンチ断面



5. No5トレンチ
6. No5トレンチ断面
7. No7トレンチ
8. No7トレンチ断面



9. No6トレンチ
10. No6トレンチ断面
11. No11トレンチ
12. No11トレンチ断面



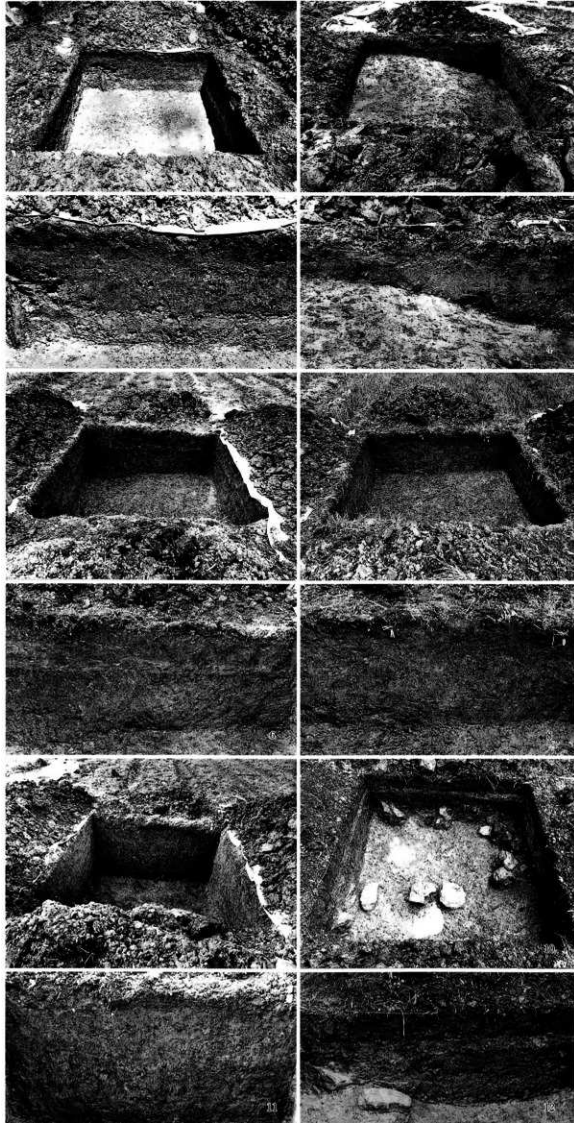
図版14

中畑地区遺跡確認調査

1. No13トレンチ
2. No13トレンチ断面
3. No21トレンチ
4. No21トレンチ断面

5. No15トレンチ
6. No15トレンチ断面
7. No16トレンチ
8. No16トレンチ断面

9. No17トレンチ
10. No17トレンチ断面
11. No19トレンチ
12. No19トレンチ断面





7



13



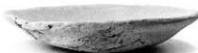
47



48



14



22



29



35



36



37



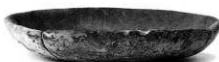
38



39



15



95



108



113



142



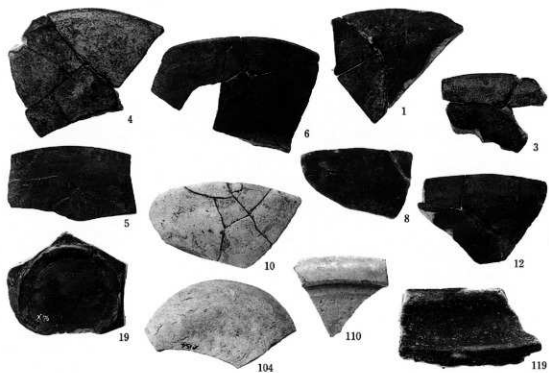
187



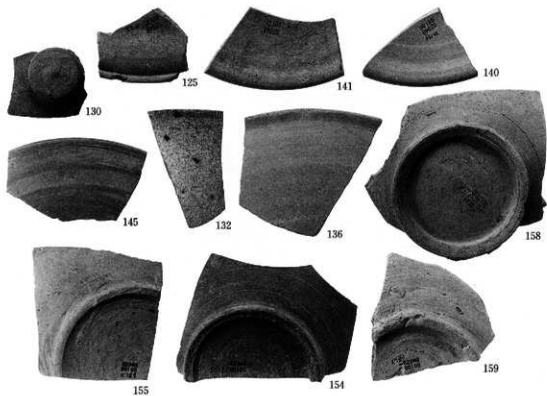
180



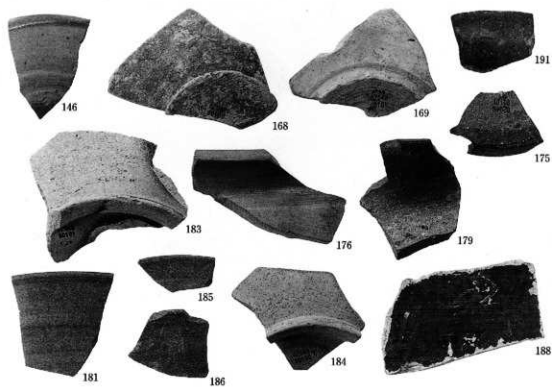
40



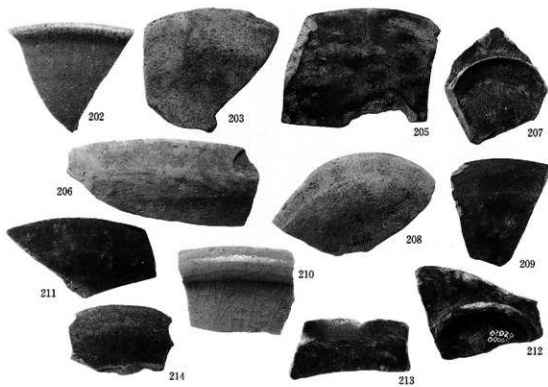
1. 田能北遺跡 L区



2. 田能北遺跡 O区



1. 田能北遺跡O区



2. 中畑地区遺跡確認調査

報 告 書 抄 録

ふりがな	たのういせきぐんはつくつちょうさがいよう・Ⅳ							
書名	田能遺跡群発掘調査概要・Ⅳ							
副書名	府営農地還元資源利活用事業「樫田地区」の調査							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	奥 和之							
編集機関	大阪府教育委員会							
所在地	〒540-8571 大阪府大阪市中央区大手前2丁目 TEL 06-6941-0351							
発行年月日	2003年3月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °'"	東経 °'"	調査期間	面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
たのういせき 田能北遺跡	たかつかしおおあび 高槻市大字 田能地内	27207	178	34° 57' 03"	135° 35' 30"	2002年8月 ? 同年12月	1,893 92	農地還元資源利活用事業「樫田地区」
なかほたいせき 中畑遺跡	たかつかしおおあび 高槻市大字 なかほたちち 中畑地内			34° 57' 25"	135° 36' 41"	2002年4月 ? 同年5月		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
田能北遺跡	集落跡	平安時代 中世	建物跡 溝 土坑 土墳墓		須恵器 黒色土器 緑釉陶器 瓦器 土師器 青磁 白磁			
中畑遺跡	集落跡	中世	柱穴 土坑		須恵器 瓦器 土師器 青磁 白磁			

田能遺跡群発掘調査概要・Ⅳ

- 府営農地還元資源利活用事業「樫田地区」の調査 -

発行 大阪府教育委員会
〒540-8571
大阪市中央区大手前2丁目
TEL 06-6941-0351

発行日 2003年3月31日

印刷 株式会社 中島弘文堂印刷所
大阪市東成区深江南2丁目6番8号
TEL 06-6976-8761

